浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第１６集

羽黒平（３）遺跡発掘調査報告書

―「美人川再生事業」に係る緊急発掘調査―

平成１６年度
浪岡町教育委員会

序

浪岡町は、中世城館である「浪岡城跡」をはじめとして、中世の遺跡や民話・伝説が数多く残っていることから、「中世の里なみおか」を地域の特色としてまちづくりに活かしてまいりました。

このたび、その一環として五本松地区に残る町指定文化財の「楊枝杉」と「羽黒神社」、「美人川伝説」を活用した「美人川再生事業」を実施することになりましたが、事業予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である「羽黒平(３)遺跡」の一部であったため、記録保存を行うために発掘調査を行ったものです。

羽黒平(３)遺跡は青森県立郷土館収蔵の「風韻堂コレクション」の収蔵品や町指定文化財の「立ち膝をする土偶」など縄文時代晩期の優れた資料が発見されたことでも知られている遺跡であるため、事業により地下の遺構や遺物に影響が生じる危険性がある個所について、平成６年度から８年度までの３年間をかけ発掘調査を行いました。

調査により、縄文時代晩期を中心に平安時代や中世まで幅広い時代の遺物や建物などを確認できたことから、長く人々が暮らしてきた場所として、浪岡地区の歴史の一助となる成果が得られたと考えております。

教育委員会では、今後も、調査や文化財の保護・保存などを進めてまいる所存です。関係各位に於かれましては、旧に倍しての御力添えをお願い申し上げます。

最後に、ご指導・ご協力を賜りました皆様に記して感謝の意を表するものであります。

平成１７年３月

浪岡町教育委員会
教育長　鎌田　慎也

例　　言

1　本書は、平成７～８年度に浪岡町の「美人川再生事業」に伴い、浪岡町教育委員会が実施した羽黒平（３）遺跡の緊急発掘調査にかかる発掘調査報告書である。

2　本書の編集並びに執筆は木村浩一が担当した。

3　本報告書の土層の注記については、『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄　1993）に準拠し、基本層序及び検出遺構の土層観察表は、巻末に一括して示した。

4　挿図の方位、縮尺は図ごとに異なる。各種遺構平面図の方位記号は磁北を示すものとし、挿図、写真図版の縮尺は統一を図らないため、図ごとにスケールを表記した。

5　本文中の計測値の表記において、調査区外や削平等により未確認な場合は（　）でくくり示した。
遺物計測値においても同様の扱いとし、破片等測定ができない物は確認できた数値を（　）でくくり示した。

6　遺物番号は個体ごとに番号を付し、文中では（　）内に示した。

7　出土遺物及び記録図面等並びに写真関係資料等は、浪岡町教育委員会が保管している。

8　発掘調査の実施にあたっては、調査対象区周辺の地権者の方々をはじめ、多くの方々のご協力をいただいた。また、報告書の作成にあたり、発掘調査顧問からのご教示・ご指導を賜わった。
ここに深く感謝の意を表する次第である。

9　本報告書で「概報」とあるものは、平成６年度に行った「羽黒平（３）遺跡発掘［試掘］調査報告書」を示すものである。

目　　次

序

例言・目次

第１章　調査にいたる経緯　……　１

第２章　検出遺構　……　６

第３章　出土遺物　……　２０

第４章　まとめ　……　７１

出土遺物計測表・遺構土層注記表　……　７２

発掘調査抄録　……　８２

写真図版　……　８３

第１章　調査に至る経緯（平成７年３月刊　羽黒平（３）遺跡発掘[試掘]調査報告書から抜粋）

浪岡町には国指定史跡浪岡城跡をはじめとする、多くの埋蔵文化財包蔵地が所在し、まちづくりのキャッチフレーズを「中世の里」とするなど、歴史的遺産がいたるところに存在する。

今回調査対象となった羽黒平（３）遺跡に関しても、今回の調査地である丘陵上から浪岡川よりに一段低くなる河川氾濫原の現水田地については、昭和３２年頃に町の有識者によって発掘調査がなされ、昭和３３年１月から５月までの「広報行丘(なみおか)」にて計４回にわたって発掘調査の写真や出土遺物の写真が掲載されている。現在残されている遺物などを見ると、縄文晩期大洞Ｃ１式を中心とする泥炭地遺跡であったと推定される。

なお、調査地に接する羽黒神社は「美人川伝説」の擬定地であるとともに３０年以上前に湧き水の池から龍神が現れたという神社であり、現在、境内には龍神様・十和田様・山の神様・二十三夜様・羽黒権現様が祭られており、毎年４月１９日には祭礼日となり、毎月１９日には近隣の人々が参拝に訪れている。本調査にあたっては、そのような歴史的経緯を考慮して、縄文晩期を中心とする遺構・遺物発見に努めるよう以下の発掘[試掘]調査要項によって実施することとなった。

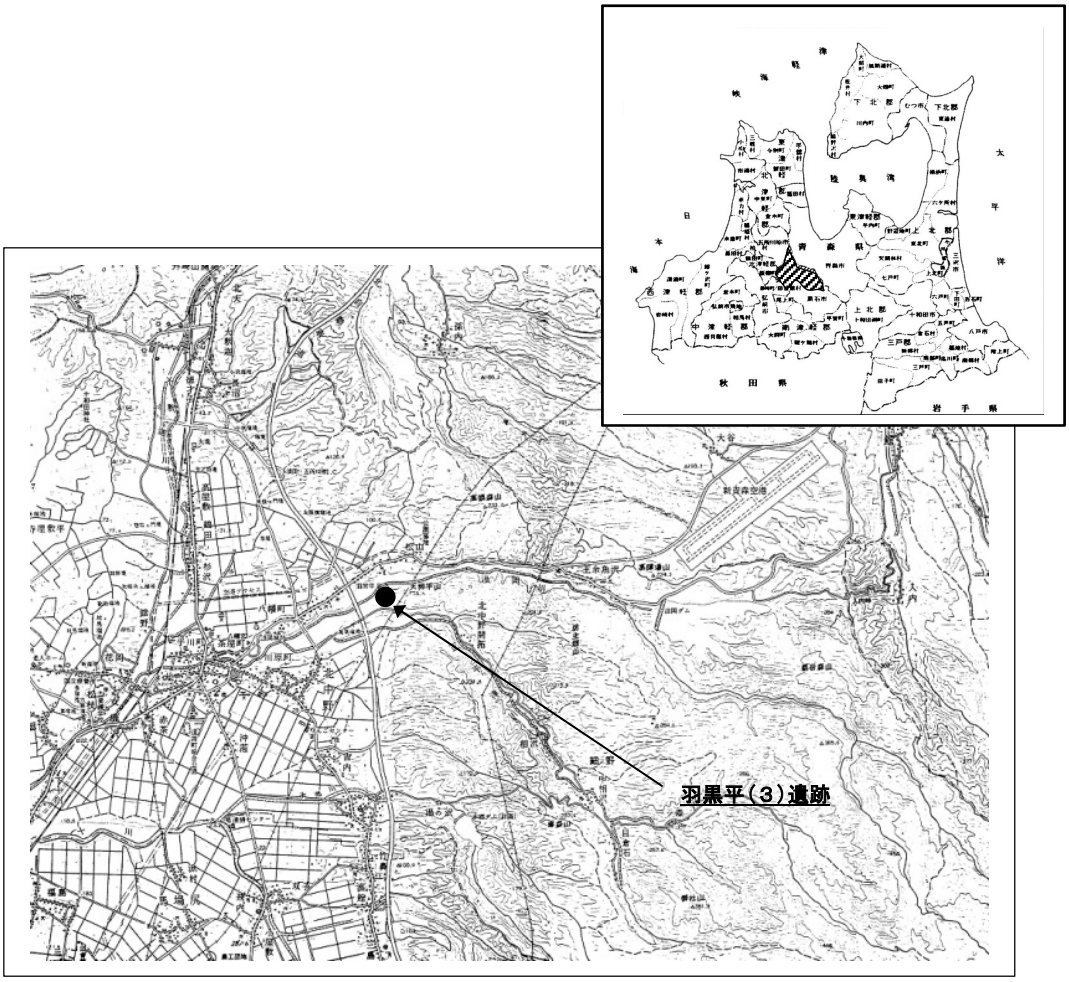


図１．遺跡位置図

羽黒平（３）遺跡発掘［試掘］調査要項

（平成６年度試掘調査時の要項を基に、平成７・８年度の要項を作成した）

浪岡町教育委員会生涯学習課

１．調査の目的

中世初期に時代認定できる伝説「美人川と炭焼藤太」の擬定地である羽黒神社周辺は豊富な文化財が存在し、県立郷土館収蔵の「風韻堂コレクション」所収の考古学資料や町指定の考古学資料「立ち膝をする土偶」及び天然記念物の「楊枝杉」の存在はその史料価値を示す事例でもある。

今回、浪岡町は、まちづくりの主要施策である『中世の里』づくりの一環として「美人川再生事業」を計画したところ、その対象地に羽黒平（３）遺跡が存在し埋蔵文化財に影響を及ぼす状況が発生した。

そのため、浪岡町は文化財保護の立場から緊急に発掘調査を実施して記録保存するとともに、今後の事業計画に対する参考資料とするために事業対象地のうち工事により遺構等が失われる恐れのある部分について調査を行うものである。

２．調査対象地及び所有者

調査地は、東から連なる丘陵の東端部であり、近年まで果樹園地として利用されてきた。調査地は町有地及び個人有地である（調査対象遺跡は図１参照）。

調査地地番等　　青森県南津軽郡浪岡町大字五本松字羽黒平１０－１　他

調査面積　　２，８５０㎡　（平成６年度～８年度実績）

３．調査期間

平成６年度　４月２２日から１０月１８日まで（現場調査）

１０月１９日から平成７年３月２０まで（整理・概報作成・刊行）

平成７年度　６月２６日から１１月３０日まで（現場調査）

平成８年１月１６日から２月２９日まで（整理作業）

平成８年度　６月３日から１１月１０日まで（現場調査）

平成９年１月２７日から３月３１日まで（整理作業）

４．調査体制

平成６年度　調査事務局

（浪岡町教育委員会事務局）

教育長　　蝦名俊吉

生涯学習課長　　西塚幸一

生涯学習課文化班長　　石岡まつ

生涯学習課文化班主事　木村浩一

（浪岡町役場）

企画課長　　福士芳巳

企画課主任主査　　山内幸博

調査担当者

浪岡町史編纂室主査　　工藤清泰

調査顧問

青森県立郷土館学芸課長補佐　成田誠治

調査補助員

斎藤とも子、金崎友子

調査協力員

弘前大学教養部学生

調査作業員

太田栄、雪田美信、佐山勇雄、岩崎竹次郎、若林弘、平井つるゑ、山内みつゑ、菊池さな、山田アエ、兼平ツエ、佐藤レオエ、佐藤イサ

平成７年度　調査事務局

（浪岡町教育委員会事務局）

教育長　　蝦名俊吉

生涯学習課長　　工藤正志

生涯学習課文化班長　　石岡まつ

生涯学習課文化班主事　木村浩一（調査補助）

生涯学習課文化班主事　高橋智佳子（調査担当）

調査顧問

青森県立郷土館学芸課長補佐　成田誠治

調査補助員

斎藤とも子、金崎友子、対馬桂子、武田秀美

調査作業員

太田栄、雪田美信、山田初三郎、若林弘、西谷良二、長谷川ちよ、平井つるゑ、山内みつゑ、山田アエ、成田チサ、菊池さな、兼平ツエ、佐藤レオエ、佐藤イサ、寺山ツヤ、工藤愛子、木村節、長谷川やつゑ

平成８年度　調査事務局

（浪岡町教育委員会事務局）

教育長　　蝦名俊吉

生涯学習課長　　工藤正志

生涯学習課文化班長　　山内幸博

生涯学習課文化班主査　木村浩一

生涯学習課文化班主事　高橋智佳子（調査担当）

調査顧問

青森県立郷土館学芸課長補佐　成田誠治

調査補助員

対馬桂子、間山信子、山内明美

調査作業員

成田せつ、工藤初江、寺山ツヤ、工藤タツエ、石村玲子、横山きくゑ、工藤愛子、木村節、佐藤イサ、有馬まつえ、長谷川ちよ、太田キサ、斉藤ミツ、小笠原昭子、長谷川やつゑ

5．遺跡の概要について

羽黒平（３）遺跡は浪岡町大字五本松字羽黒平に所在し、遺物包含地として登録されている。現状は住宅地及び畑地である。

発掘調査は奥羽山脈から津軽平野へと突き出た丘陵地上にある同遺跡のうち、果樹園として利用されてきた部分、南北約 120m、東西約 60m、計 7,200 ㎡のうち約 2,850 ㎡の範囲を対象とした。

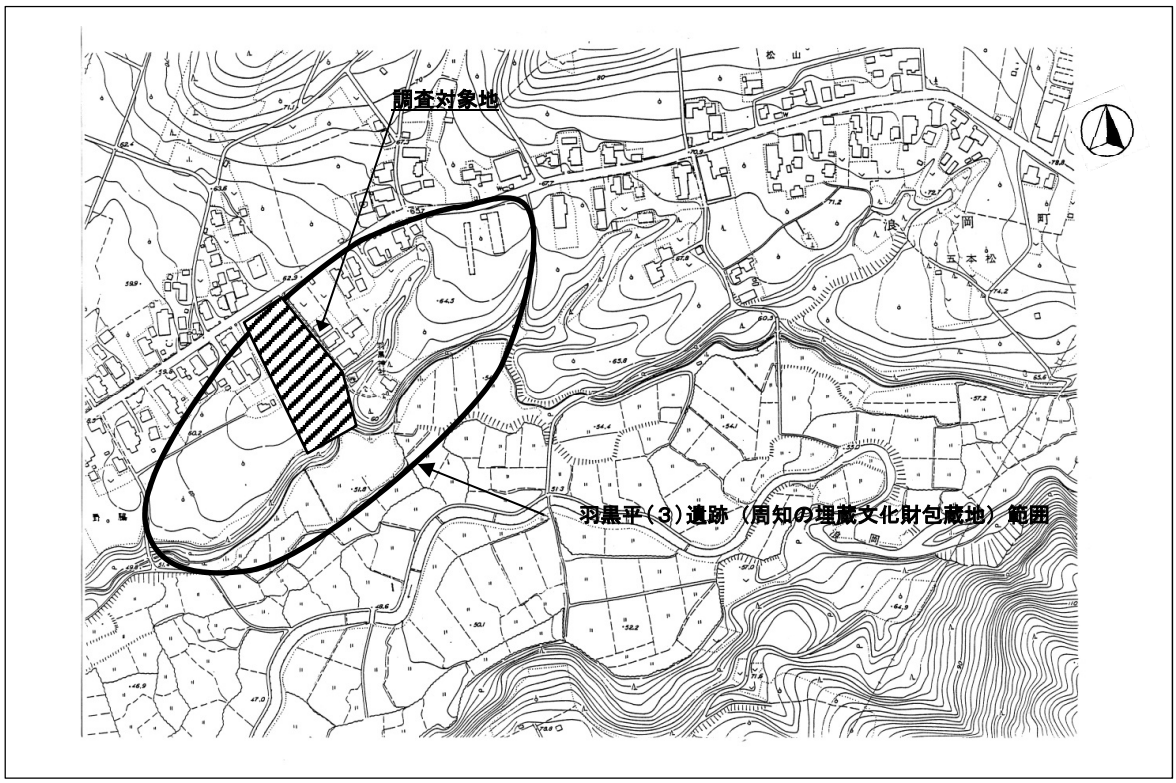


図２．遺跡範囲と調査対象区位置図

6．調査方法

今回の調査対象地は現況が農地（果樹園）であるが、「美人川再生事業」に伴い削平する部分について、調査を行うこととし、平成６年度に試掘調査、平成７・８年度に本調査を実施した。

1）測量（実測）は、遣り方と平板測量を併用する。

2）遺構略称は、従来までの浪岡町の調査と整合性を持たせるため、原則として独立行政法人奈良文化財研究所方式をとる。

例　竪穴住居・ＳＩ、竪穴建物跡・ＳＴ、溝跡・ＳＤ、性格不明遺構・ＳＸなど

3）遺物略称は、従来までの調査と整合性を持たせるため、浪岡町での発掘調査方式をとる。

例　土器・Ｐ、石製品・Ｓ、鉄製品・Ｆ　など

遺構については、時代・時期を問わず掘り下げを行う。遺構について平板実測及び写真撮影等を行い記録の保存に努める。遺物については、可能な限りすべて取り上げるものとする。

調査区については、10mグリッドを基本とし、木杭を設定した。

基準となる杭は、南北軸をアルファベット（南へ昇順）、東西軸を算用数字（東へ昇順）として設定した。

7．調査報告書の作成

調査結果については、「羽黒平（3）遺跡発掘調査報告書―「美人川再生事業」に係る緊急発掘調査―」として刊行し、成果を公表する。

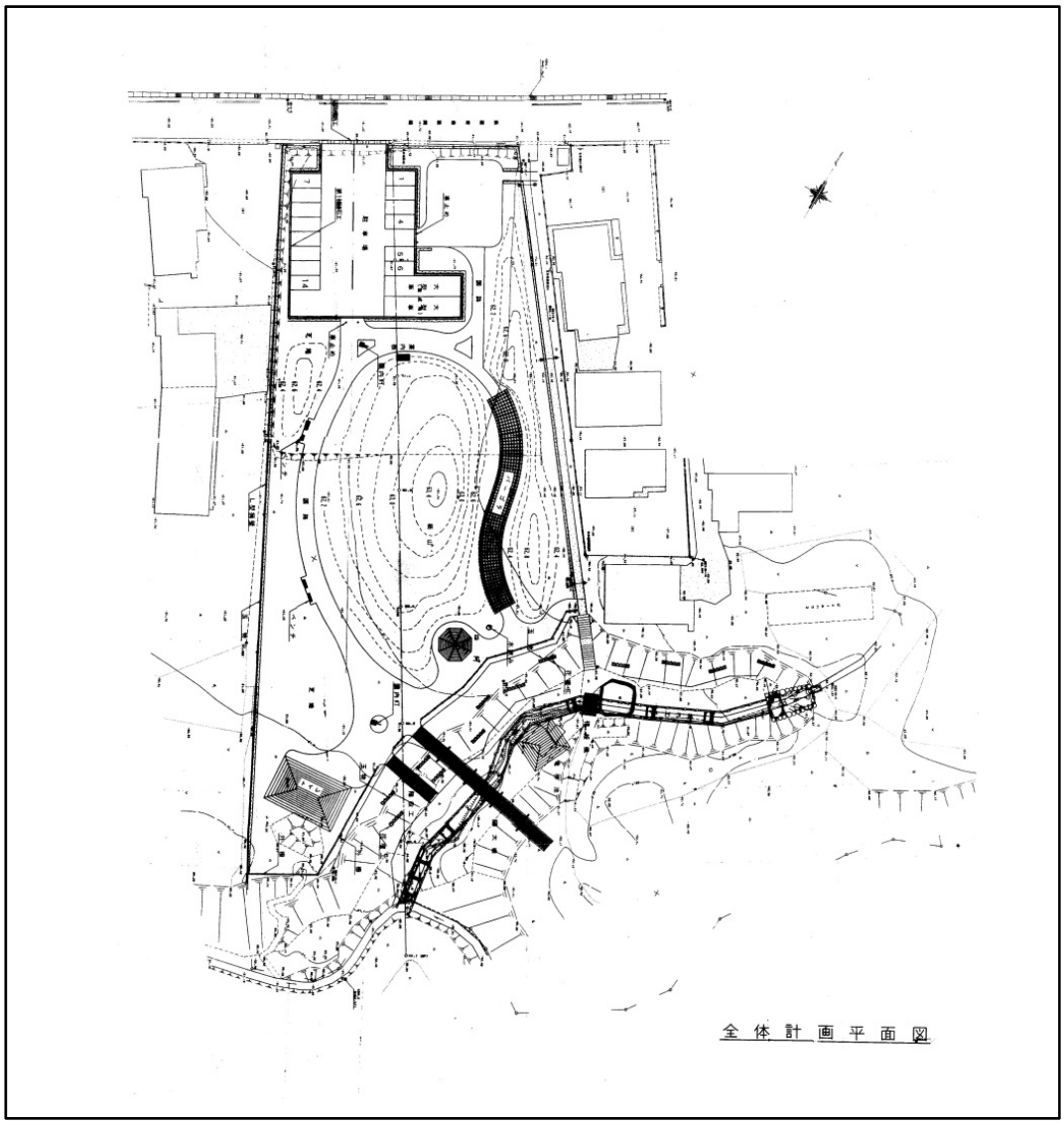


図3．美人川再生事業計画平面図

第２章　検出遺構

事業により削平される個所について調査を行い、盛り土により遺構・遺物の保存が図られる部分については調査を行わず現状の維持に努めた。全体からは縄文時代晩期の円形住居跡やフラスコ状ピット、埋設土器遺構。平安時代の竪穴住居跡、時期不明の溝跡等が検出された。調査箇所及び調査区名称・位置については、平面図（図４）参照。

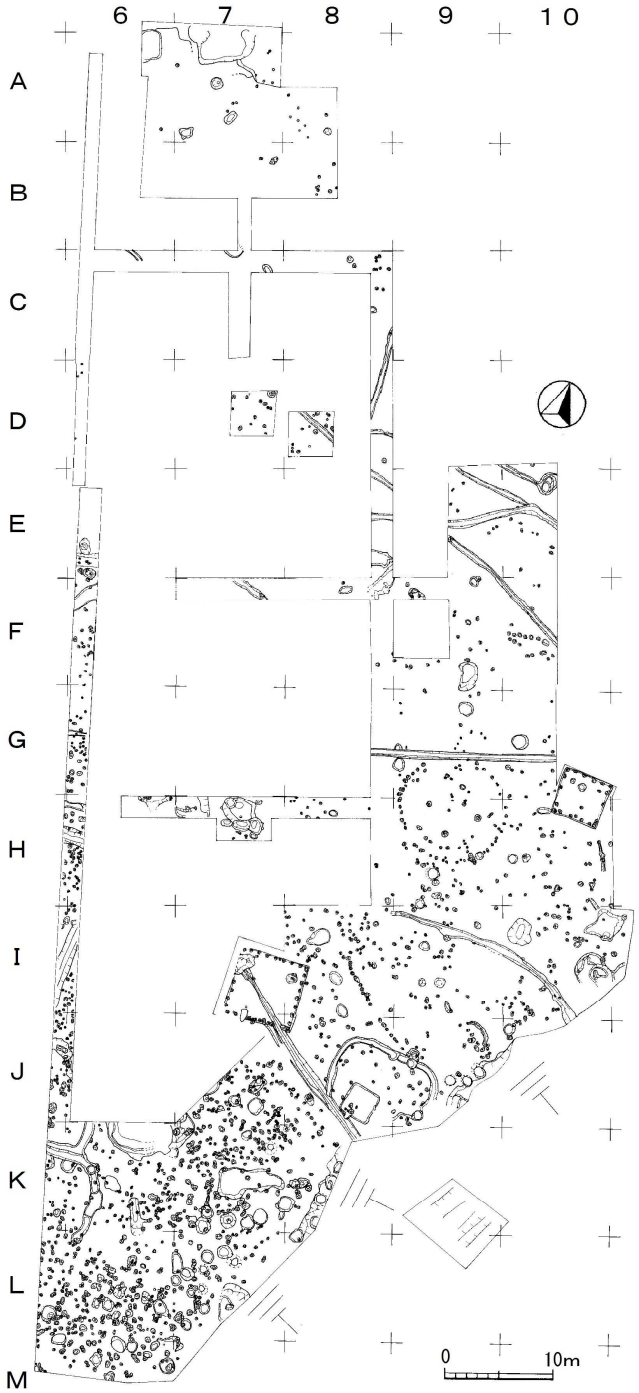


図４．調査区内遺構配置図

遺跡は河岸段丘上の開発予定部分と、遺跡南側の段丘から3mほど標高の低い沢部分を調査した。

段丘上からは住居跡や貯蔵穴と思われるフラスコ状ピット等が検出されたが、沢部分からは特に建物や構造物等の痕跡は検出できなかった。遺跡の南側及び南西側の水田（畔・水路）からは、過去に縄文土器の破片が出土したという地元の方からの情報を得ていたが、今回調査した部分からは縄文時代よりも中近世の遺物が主に出土した。このことは、本地域が青森（陸奥湾）と弘前・秋田を結ぶ大豆坂通り（まめさかどおり）の沿線であることから、中近世の集落内で使用した遺物とする考え方や、本調査区と沢を挟んだ対岸の羽黒平神社参拝に伴い使用された遺物である可能性など、多様な要因も考えられる。

遺構の分布は、北側の道路沿いでは遺構が薄かった。これは、県道青森－浪岡線道路設置や果樹園耕作時に削平された可能性が高いと思われるが、柱穴・溝跡等についても検出数が著しく少ないことから、元来遺構が少なかったことも考えられる。

南側の河岸に近づくにつれ遺構の密度が高くなり、縄文時代の遺構では晩期のものと思われる円形の住居跡をはじめ、土器を埋設したＰｉｔやフラスコ状ピットなどを、平安時代の遺構では、竪穴住居、溝跡などを検出した。

以下、北側から南側に向かいアルファベット順３列（30m）ごとに遺構の検出状況を述べてゆくことと、各遺構について極力遺構別に述べることとしたいが、発掘調査現場での遺構実測図の整理に不備があり、遺構平面図と遺構断面図を同定することが不可能となってしまったため、掲載遺構数が少ないことをご容赦願いたい。また、３ヵ年にわたる調査のため、一遺構に異なる遺構番号を付すこととなってしまった。報告書では敢えて統一することなく調査時の遺構番号を尊重して記載することとした。

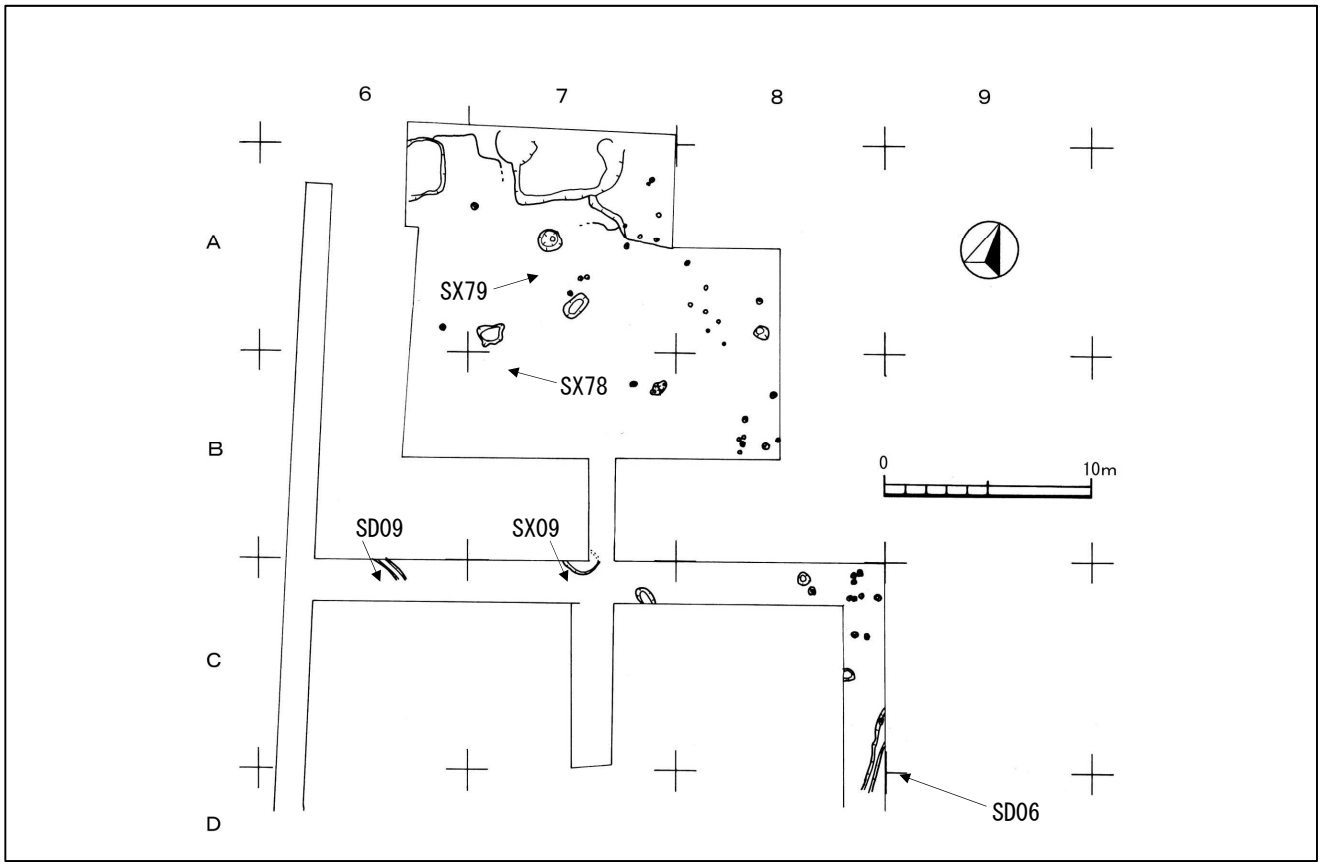


図５．Ａ～Ｃ区の遺構検出状況

Ａ～Ｃ区（図５）は、調査区のうち最も北側に位置し、Ａ６・７区は県道青森―浪岡線に接する調査区である。開発事業では駐車場予定地が中心となる。

ＳＤ０６・ＳＤ０９及びＳＸ０９・ＳＸ７８・ＳＸ７９を確認したが、いずれも時期は不明であった。

ＳＤ０６はさらに南側のＤ８区まで延長することを確認した。Ａ～Ｃ区の検出遺構からの出土遺物は縄文土器の破片のみであった。

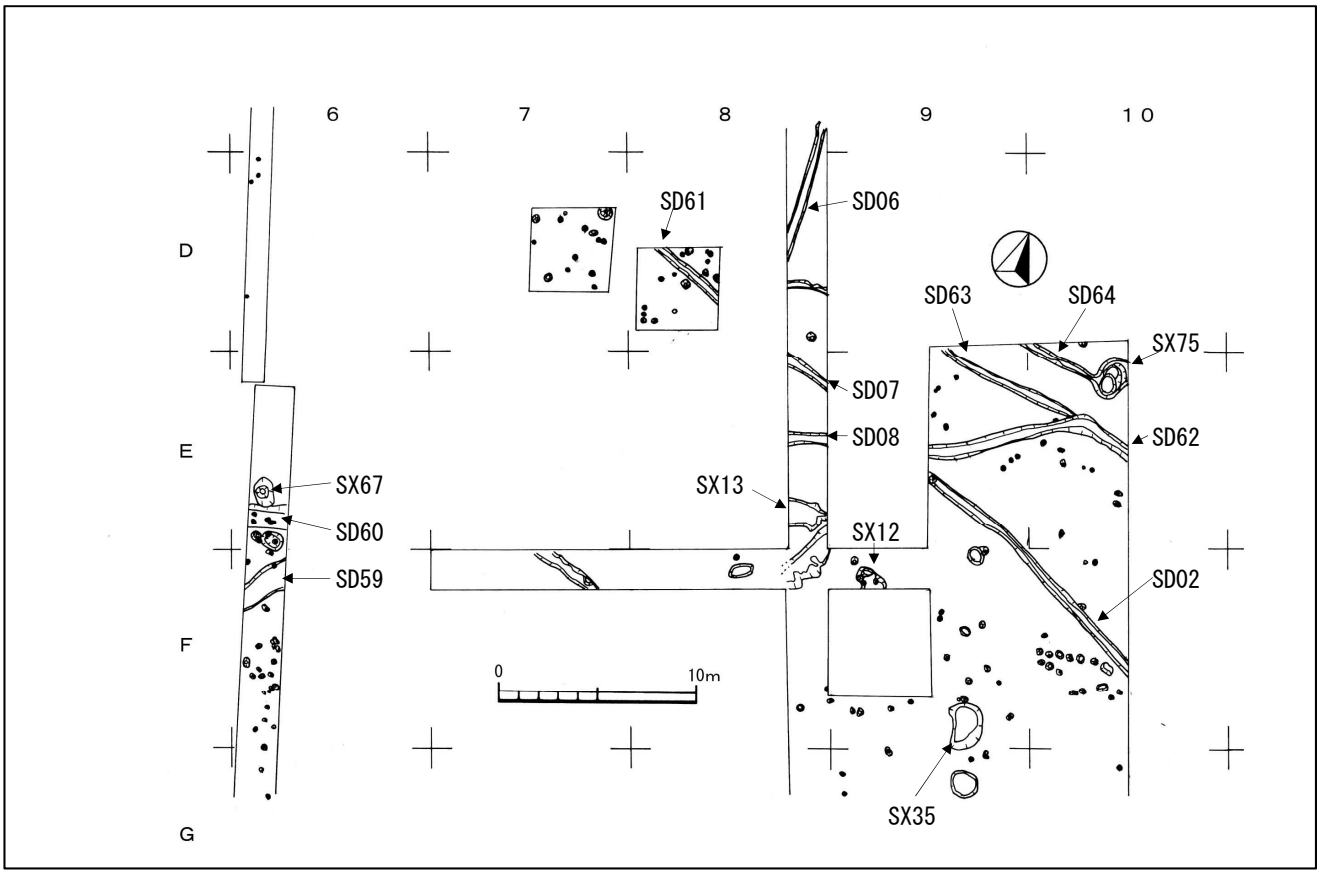


図６．Ｄ～Ｆ区の遺構検出状況

Ｄ～Ｆ区（図６）は調査区東側は藤棚（パーゴラ）の設置予定地。西側は盛り土（築山）により保護される部分であるため、トレンチ調査により遺跡の保存と遺構の状態把握に努めた。検出遺構のうち東西方向に延びる溝跡は、Ｄ・Ｅ・Ｆの８・９・１０区にまたがりＳＤ０２（ＳＤ０７・ＳＤ６１とは同一遺構）を検出した。Ｄ８区の本遺構からは石皿（２０７）が１点出土している。

Ｃ９区から延びるＳＤ０６では石鏃（９０）が１点出土している。

他に溝跡として、南西から北東方向に延びるＳＤ０８・ＳＤ０２と、軸線をほぼ同じくするＳＤ６３・ＳＤ６４、西側トレンチで検出したＳＤ５９・ＳＤ６０等の溝跡が縦横に交差して延びているが、新旧関係を把握できなかったため時代変遷は不明である。いずれにせよ、それぞれの溝跡は河岸段丘（沢）に向かい傾斜して延びているため、排水の役割を果たしていたことが窺える。

Ｆ９区検出のＳＸ３５は250㎝×150㎝の不定形土坑であり、石鏃（１０３）が１点出土している。

Ｅ６区検出のＳＸ６７（図７、表５）は 140 ㎝×95 ㎝の楕円形土坑であり、打製石刃（１９５・１９６）が出土している。

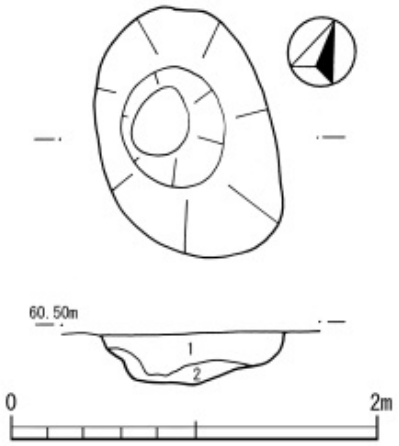


図７．ＳＸ６７遺構平面図

Ｅ１０区検出のＳＸ７５（図８、表６）は 220 ㎝×150 ㎝、深さも 150 ㎝の楕円形土坑である。本遺構はＳＤ６４と重複しているが、新旧関係は不明である。なお、溝跡に付随する遺構（水溜等）である可能性も考えられる。

いずれの遺構についても時期判断は難しい。耕作等に伴う埋戻し時の遺物混入等が考慮されるため、縄文時代の遺構であるか否かについても判別しがたい。

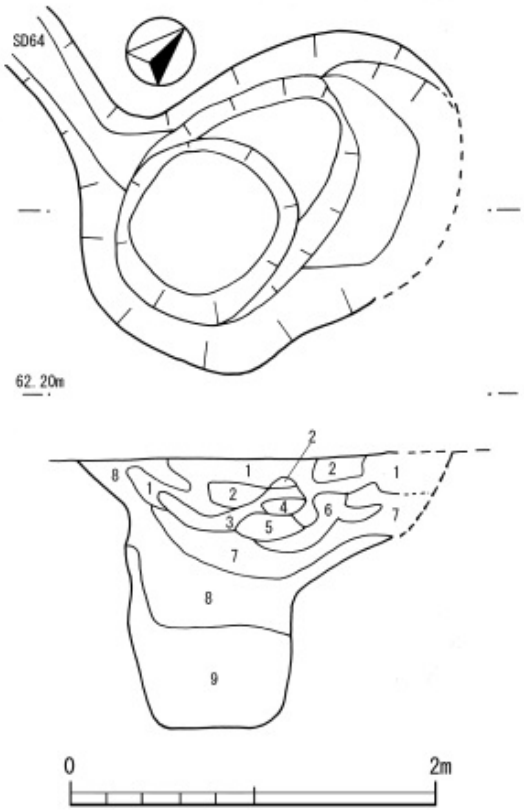


図８．ＳＸ７５遺構平面図

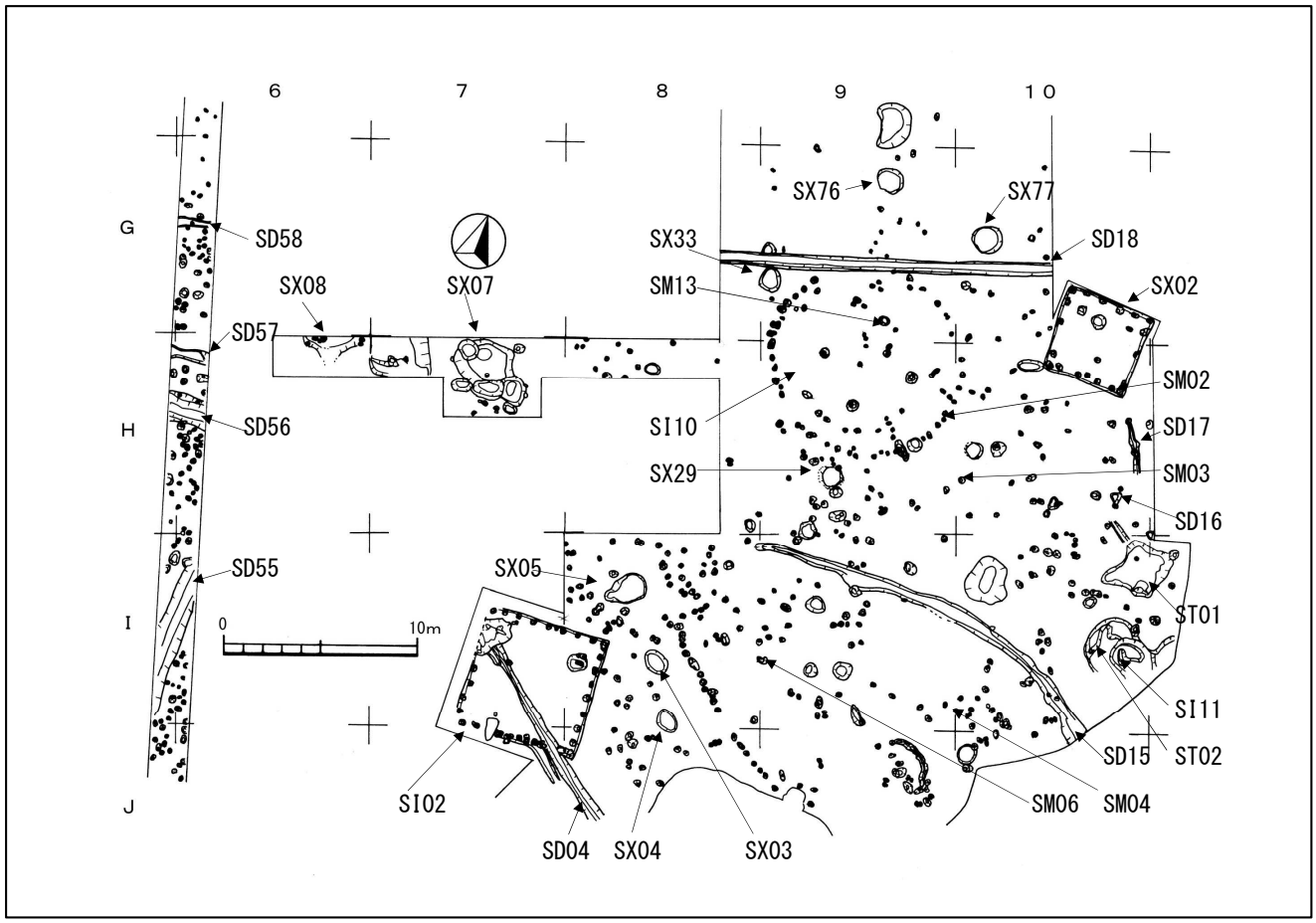


図９．Ｇ～Ｉ区の遺構検出状況

Ｇ～Ｉ区（図９）は藤棚（パーゴラ）や四阿を整備する予定地である。

Ｇ・Ｈ９区から直径10m程の縄文時代晩期と思われる円形住居跡のＳＩ１０（図１０）を検出した。主柱穴を４本有し、床面は地山面までしか掘り下げを行っていない建物で、平地式住居の可能性がある。外周の柱穴列からは南東側に出入り口施設を設けたものと考えられる。また、内部の柱穴列は主柱穴の位置から、建て替えではなく住居跡の内部構造に関する柱穴の可能性が考えられる。ＳＩ１０からは深鉢型土器（1）、縄文晩期の台付浅鉢型土器（３４）、広口壺型土器（６１）、注口土器の口縁部（６３）、石鏃（９１・９２・９３）、石箆（１５５）が出土している。ただし、（1）については、縄文早期の赤御堂式土器と思われる内外面に斜縄文を施してあるものであり、本遺構に伴うものではないと思われる。また、ＳＩ１０に関連すると思われる埋設土器遺構ＳＭ０２・ＳＭ１３を検出している。

ＳＭ０２（図１１、表７）からは縄文晩期の深鉢型土器を、ＳＭ１３（図１２、表８）からは深鉢型土器（１５）の底部が出土している。

埋設土器遺構は他にＨ１０区でＳＭ０３を、Ｉ９区でＳＭ０４・ＳＭ０６を検出しているが、他の遺構との関連性は把握できない状況である。いずれも縄文時代晩期の深鉢型土器の胴部下半以下を検出したものである。ＳＭ０４（図１３、表９）から出土した深鉢型土器（3）を写真で示す。

また、ＳＩ１０周辺からは、ＳＸ２９・ＳＸ３３・ＳＸ７６・ＳＸ７７等の土坑を検出した。

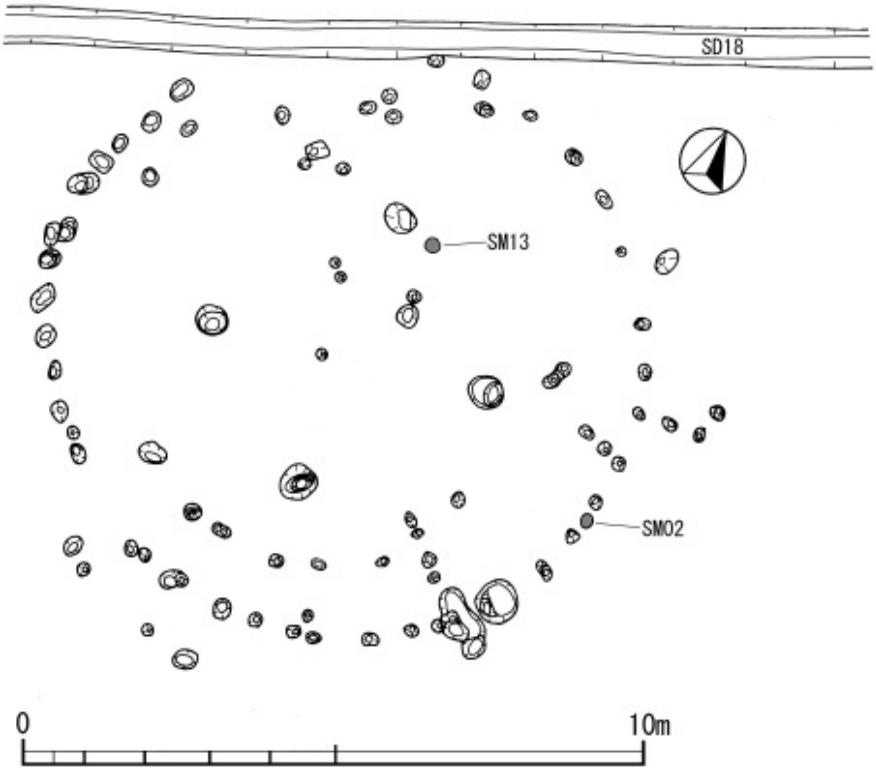


図１０．ＳＩ１０遺構平面図

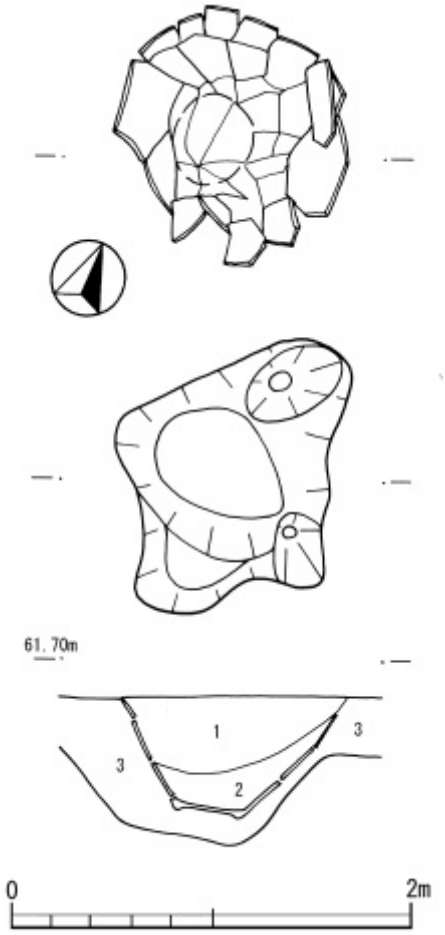


図１１．ＳＭ０２遺構平面図

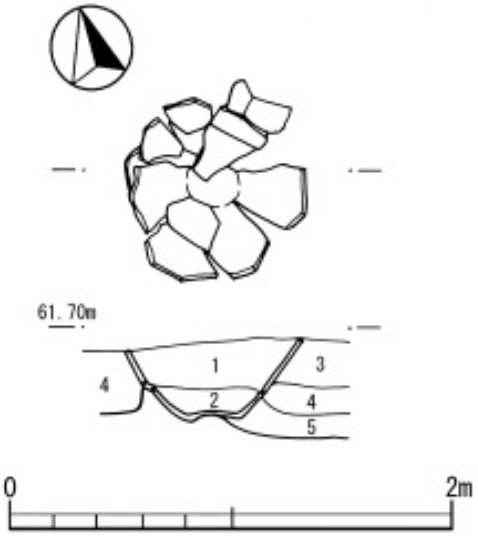


図１２．ＳＭ１３遺構平面図

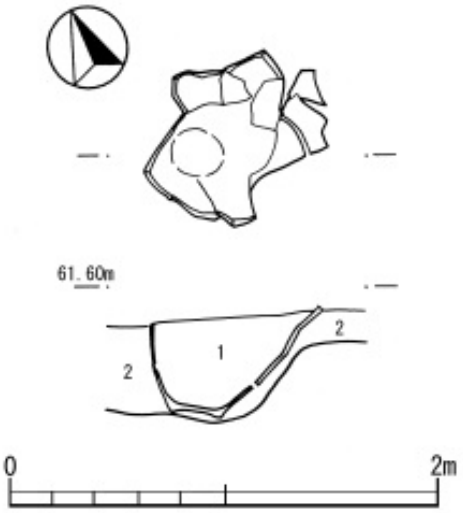


図１３．ＳＭ０４遺構平面図

ＳＸ２９（図１４、表１０）は掘り方直径 110 ㎝程度の円形土坑で、縄文晩期の深鉢型土器（２２）、壺型土器（５７・５８・５９）、石鏃（１０１・１０２）、打製刃器（１９２）、磨り石（２１３）、円形石製品（２３９）が出土している。

ＳＸ３３（図１５、表１１）は掘り方 125 ㎝×100 ㎝の卵形を呈する土坑である。特筆すべき遺物の出土は見られなかった。

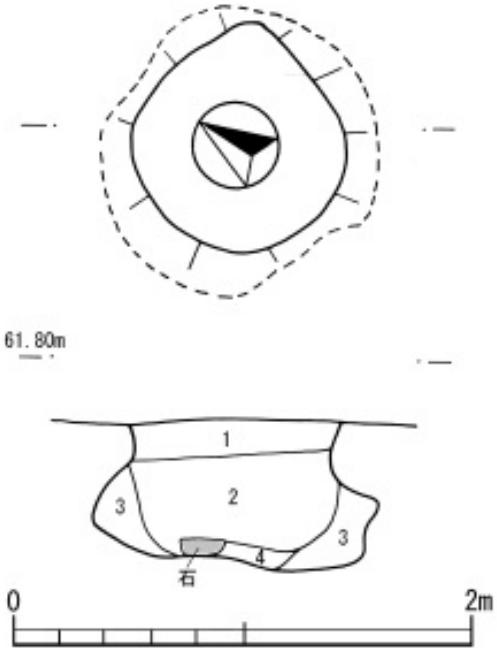


図１４．ＳＸ２９遺構平面図

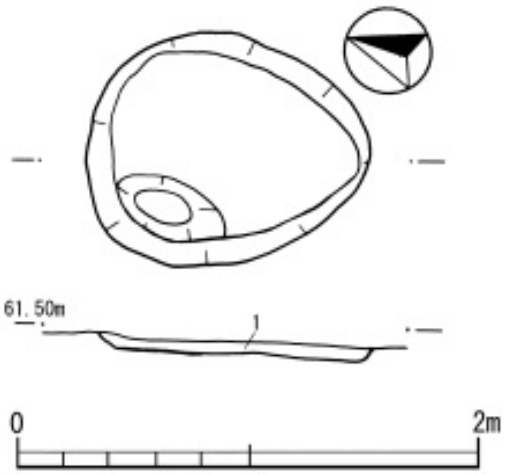


図１５．ＳＸ３３遺構平面図

ＳＸ７６（図１６、表１２）は直径 120 ㎝、深さ 20 ㎝程の土坑墓の可能性が考えられるもので、石鏃が８点（１０５～１１２）、耳飾り型土製品（８３）が出土している。

ＳＸ７７（図１７、表１３）も直径 140 ㎝、深さ 20 ㎝程とＳＸ７６と同規模であり、土坑墓の可能性が考えられるもので、石鏃が１０点（１１３～１２２）出土している。

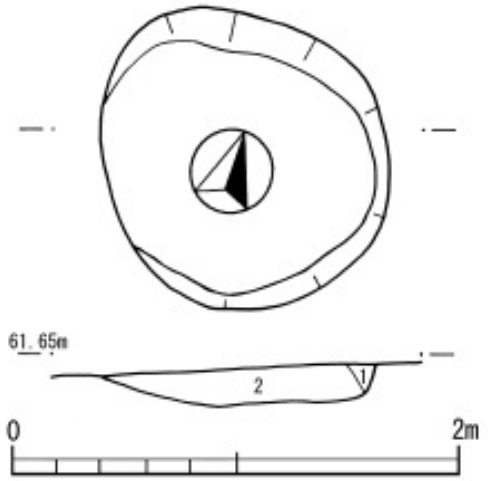


図１６．ＳＸ７６遺構平面図

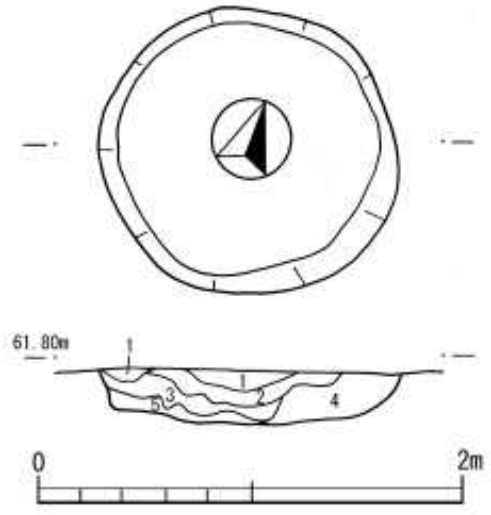


図１７．ＳＸ７７遺構平面図

Ｉ７区で検出した竪穴住居跡ＳＩ０２、Ｇ・Ｈ１０区で検出した竪穴住居跡ＳＸ０２はともに平安時代の遺構である。これらの遺構はともに概報（羽黒平（３）遺跡発掘［試掘］調査報告書を示す。以下同様とする）にて報告済みである。

溝跡は北側の調査区よりも密度は低く、時期は不明である。

Ｉ７区で検出したＳＤ０４は、ＳＩ０２と重複しＳＤ０４が新しい。特筆すべき出土遺物は無い。

Ｉ９・１０区で検出したＳＤ１５は沢に向かい東西に延びる溝跡で、縄文晩期の注口土器口縁部（６２）が出土している。

ＳＤ１６・ＳＤ１７はＨ１０区で検出したが、きわめて浅い遺構であり延長を確認できなかった。土器の小破片のみの出土で特筆すべき遺物は無い。

ＳＤ１８はＧ８・９・１０区で検出した東西方向に直線的に伸びる溝跡で、掘り方からは現代の溝跡の可能性もある。石鏃（８８・８９）、ナイフ形石器（１６５）、磨製石斧（１７２）、たたき石（２１８）、円形石製品（２３４・２３５）が出土しているが、埋戻し時の混入と考えられる。

西側トレンチ部のＩ５・６区で検出したＳＤ５５は南北に延びると思われる溝跡で、石箆（１５７・１５８）が出土している。

Ｈ６区で検出したＳＤ５６は東西に延びると思われる溝跡で、打製刃器（１９１）、円形石製品（２３６）が出土している。

ＳＤ５６に並走するように検出したＳＤ５７からは石錐（１４２）が出土している。

Ｇ６区で検出したＳＤ５８からは、土器の小破片のみで特筆すべき出土遺物は無い。溝跡については、いずれも時期は判別できなかった。

その他、性格不明遺構として、ＳＸ０３・ＳＸ０４・ＳＸ０７・ＳＸ０８を検出した。

ＳＸ０３はＩ８区で検出した140㎝×100㎝の楕円形の土坑で、石鏃（９５）が１点出土している。

ＳＸ０４もＩ８区で検出した120㎝×90㎝程の土坑であるが特筆すべき出土遺物は無い。

ＳＸ０７はＨ７区で検出したが、農作業による撹乱と思われるもので、縄文晩期の深鉢型土器（２０）、台付浅鉢型土器（３２）台付鉢型土器（３３・３９）、皿型土器（４６）、壺型土器（５６）、土偶（７４）、土器転用円形土製品（８４）、石鏃（９６～１００）、石錐（１４３）、ナイフ形石器（１６７）が出土している。

Ｈ６区で検出したＳＸ０８も耕作面からの掘り下げであることから、農耕による撹乱跡と判断した。出土遺物は無い。

確認時に建物跡と想定して調査を進めたが、性格不明遺構または撹乱として整理した遺構もある。

Ｉ１０区で確認したＳＩ１１は不定形の遺構であり、土坑または風倒木痕の可能性がある。出土遺物は、不明石製品（２５１）、須恵器坏（２５７）、土師器甕（２５９）、土師器坏（２６１）が出土している。

ＳＩ１１と重複していると捉えたＳＴ０２についても同様であり、土坑または風倒木痕等が考えられる。出土遺物は縄文晩期の台付土器（３８）、壺型土器（５１～５５）、土師器坏（２６４）がある。

なお、Ｉ１０区で検出したＳＴ０１については、確認時に竪穴建物として位置づけ調査を進めたが、遺構平面も不定形であり、性格不明遺構として整理した。埋土からナイフ形石器（１６６）が出土している。

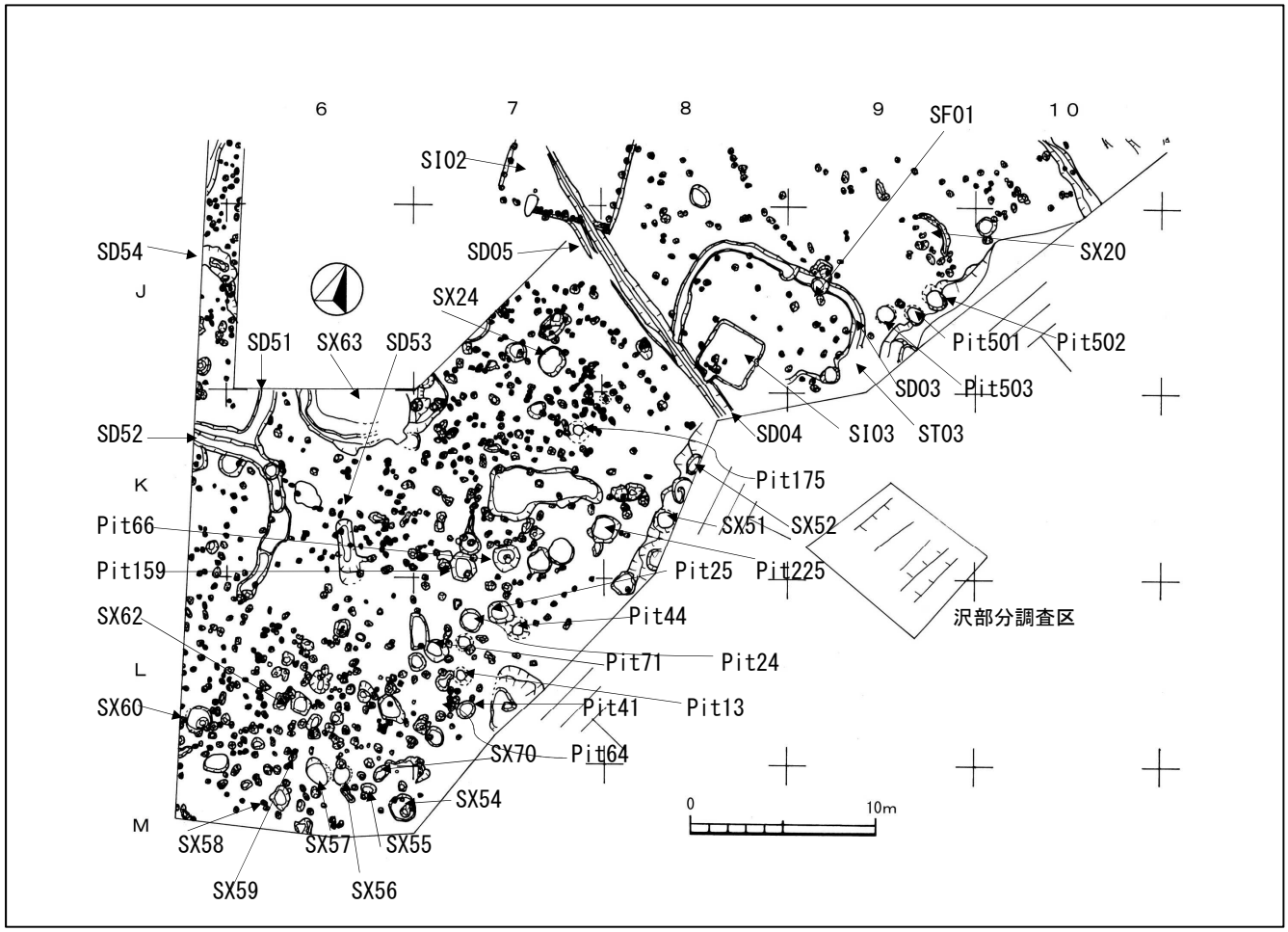


図１８．Ｊ～Ｍ区の遺構検出状況

Ｊ～Ｍ区（図１８）は、トイレや園内灯などの便益施設整備予定地であり、沢部分（斜面下）も四阿建設予定地であったため調査を行った。

Ｊ８区で検出したＳＩ０３は概報で報告済である平安時代の竪穴住居跡である。

Ｊ９区で検出したＳＦ０１（図１９、表１４）は直径 70 ㎝程度の円形を呈する石囲い炉である。周囲に明確な住居跡は確認できなかった。本遺構からの特筆すべき出土遺物は無い。

検出位置が不明であるため配置図には記していないが、埋設土器遺構のＳＭ０７（図２０、表１５）を検出した。本遺構は深鉢型土器（６・７・８・９）を４回にわたり同一Ｐｉｔに埋設しているもので、他遺構との関連は不明である。

Ｊ８・９区で検出したＳＤ０３は円形周溝状の溝跡であり、概報で報告済みのとおり中世の溝跡と考えられるが、斜面際に位置したためとＳＤ０４と重複した影響か南側が確認できなかった。ＳＤ０４との新旧関係は不明。

Ｊ・Ｋの７・８区で検出したＳＤ０４・ＳＤ０５は概報で報告のとおりＳＩ０２の北西から南東の斜面まで延伸する溝跡であり、ＳＤ０４がＳＤ０５より新しい。重複する他遺構よりも新しいと考えられるが時期は不明である。

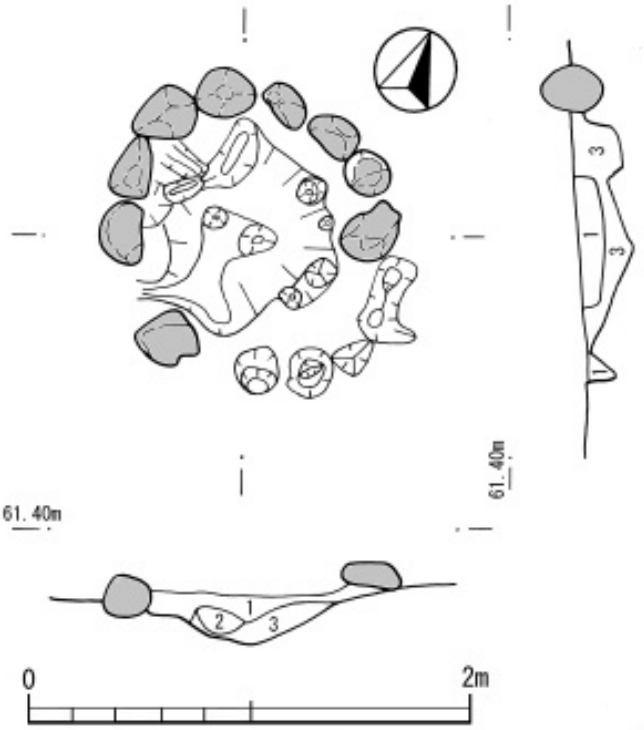


図１９．ＳＦ０１遺構平面図

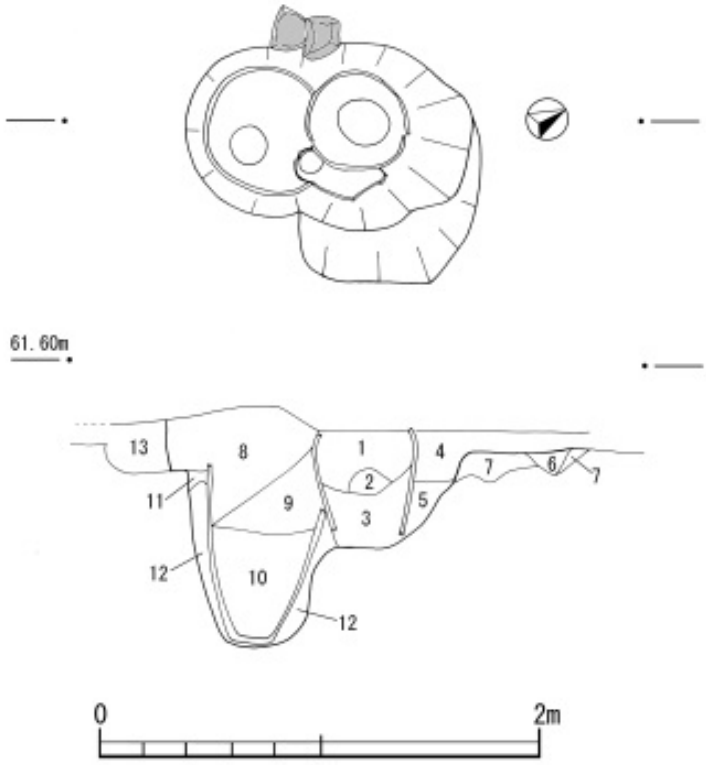


図２０．ＳＭ０７遺構平面図

Ｋ６区で検出したＳＤ５１とＪ５区で検出したＳＤ５４は同一遺構の可能性がある。Ｊ・Ｋの５・６区で検出したＳＤ５２とともに馬蹄形の溝跡となる可能性があるが、他の遺構（溝内の建物跡）が確認できなかったため性格は不明である。ＳＤ５１・ＳＤ５４からは特筆すべき出土遺物は無い。ＳＤ５２からは磨製石斧（１７３）が出土している。

Ｋ６区で検出したＳＤ５３は南北方向に延びると思われるが、掘り方が浅いことから全体が把握できなかった。特筆すべき出土遺物は無い。

Ｊ～Ｍの６・７区は、特に柱穴や土坑などを多く検出した区域で、直径１ｍを越える土坑も多数検出している。ここでは、確認時にＰｉｔ番号を付し調査を進めた遺構をＰｉｔとして、同規模の遺構でも性格不明遺構（ＳＸ）として番号を付した遺構については後述するものとする。

Ｌ７区で検出したＰｉｔ１３は掘り方直径 50 ㎝、底面直径 100 ㎝のフラスコ状ピット。

Ｌ７区で検出したＰｉｔ２４は、直径 120 ㎝程度の土坑。

Ｌ７区で検出したＰｉｔ２５は直径 130 ㎝程度の土坑。

Ｌ７区で検出したＰｉｔ４１は掘り方 100 ㎝×80 ㎝程度の楕円形土坑。

Ｌ７区で検出したＰｉｔ４４は、掘り方直径 60 ㎝、底面直径 130 ㎝程度のフラスコ状を呈する。これらの遺構からは特筆すべき出土遺物は出土しなかった。

Ｌ７区で検出したＰｉｔ６４は直径 70 ㎝程度の土坑で、袖珍の注口土器（６４）が出土している。

Ｋ７区で検出したＰｉｔ６６は直径 150 ㎝程度の土坑で、縄文晩期の台付土器（３７）、土偶の脚部と思われる土製品（７３）が出土している。

Ｌ７区で検出したＰｉｔ７１（図２１、表１６）は掘り方直径 70 ㎝、底面直径 120 ㎝程度のフラスコ状ピットで、壁面に立てかけ、沿わせた形で完形の石皿（２０５）が出土している。

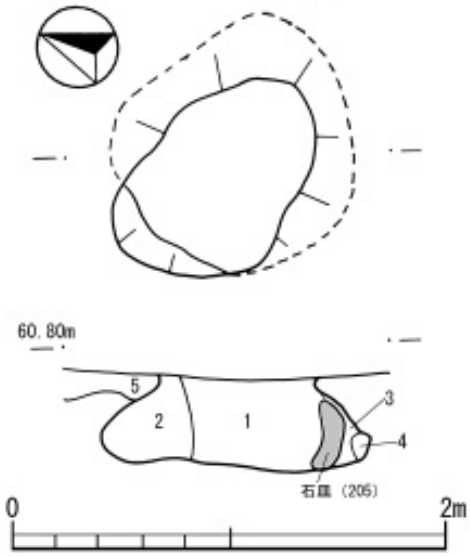


図２１．Ｐｉｔ７１遺構平面図

Ｋ７区で検出したＰｉｔ１５９は直径 120ｃｍ程度の土坑で、特筆すべき出土遺物は無い。

Ｋ７区で検出したＰｉｔ１７５は掘り方直径 60 ㎝、底面直径 120 ㎝程度のフラスコ状ピットで、石鏃（８７）が出土している。

Ｋ７・８区で検出したＰｉｔ２２５は 130 ㎝程度の隅丸方形の土坑で、特筆すべき出土遺物は無い。

Ｊ９区で検出したＰｉｔ５０１は掘り方直径 80 ㎝程度のフラスコ状ピットと思われるが､斜面の崩落により形状が不明確となっており、埋土も流れ込み等が考えられる。出土遺物は縄文晩期の深鉢型土器（２６）、土師器甕（２５８）がある。

Ｊ９区で検出したＰｉｔ５０２・Ｐｉｔ５０３ともに掘り方直径 100 ㎝程度で、底面が若干フラスコ状に広がる土坑である。特筆すべき出土遺物は無い。

性格不明遺構として分類した遺構のうち、Ｊ９区で検出したＳＸ２０は完掘時には三日月型の溝のみとなった。確認範囲からは縄文晩期の台付土器（４０・４１）、石錐（１４４・１４５）、石箆（１５９）、ナイフ形石器（１６８）、磨製石斧（１７５）、打製石斧（１８５）、磨り石状の薄い楕円形石器（不明石製品：２５２）が出土している。

Ｊ７区で検出したＳＸ２４（図２２、表１７）は 140 ㎝×150 ㎝程度の円形土坑。特筆すべき出土遺物は無い。

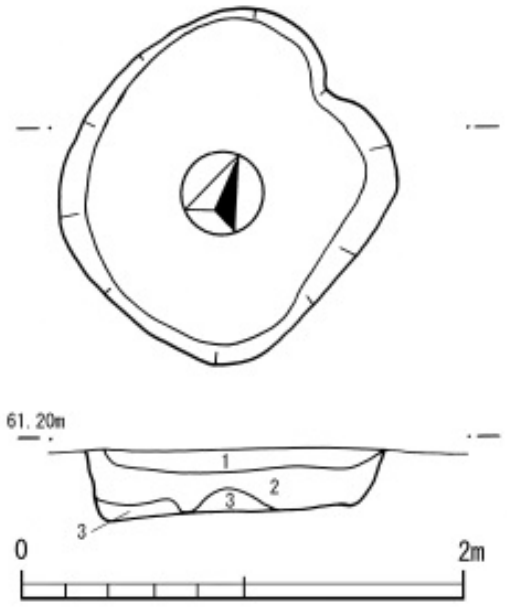


図２２．ＳＸ２４遺構平面図

Ｋ８区で検出したＳＸ５１は掘り方直径 100 ㎝、底面直径 130 ㎝程度のフラスコ状ピットであるが、南東側が斜面の崩落により欠損している。

Ｋ８区で検出したＳＸ５２は 100 ㎝×60 ㎝程度の楕円形土坑。

ＳＸ２４・ＳＸ５１・ＳＸ５２については特筆すべき出土遺物は無い。

Ｍ６区からはＳＸ５４～５９を検出している。

ＳＸ５４は直径 130 ㎝程度の不定形土坑で、縄文晩期の深鉢型土器（２３）が出土している。

ＳＸ５５は 50×80 ㎝程度の楕円形土坑で特筆すべき出土遺物は無い。

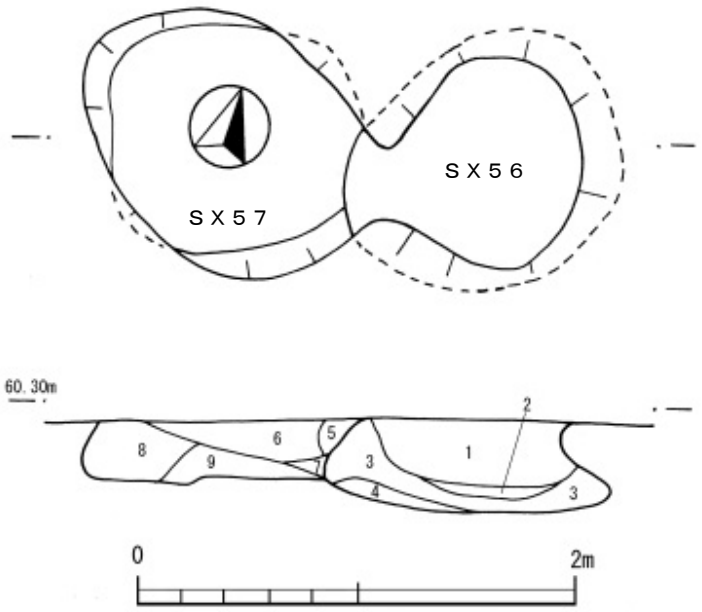


図２３．ＳＸ５６・ＳＸ５７遺構平面図

ＳＸ５６（図２３、表１８）は掘り方直径 80 ㎝程度、底面直径 110 ㎝程度のフラスコ状ピットで、縄文晩期の浅鉢型土器（２７）が出土している。

ＳＸ５７（図２３、表１８）は掘り方 110 ㎝×150 ㎝程度の楕円形土坑で特筆すべき出土遺物は無い。ＳＸ５６とＳＸ５７は重複しており、ＳＸ５６が新しい。

ＳＸ５８は 100 ㎝×130 ㎝程度の楕円形土坑で、石皿（２０８）、磨り石（２１６）、石棒（２２９）が出土している。

ＳＸ５９（図２４、表１９）は掘り方直径約 90 ㎝程度で、底面の西側がややフラスコ状に膨らむ土坑で特筆すべき出土遺物は無い。

Ｌ５区で検出したＳＸ６０は直径 150 ㎝程度の円形土坑で、石鏃（１０４）が出土している。

Ｌ６区で検出したＳＸ６２（図２５、表２０）は 130 ㎝×100 ㎝程度の楕円形の土坑で特筆すべき出土遺物は無い。

Ｋ６区で検出したＳＸ６３は農作業による抜根跡と思われる。打製石斧（１８６）、打製刃器（１９３）が出土している。

Ｍ６区で検出したＳＸ７０は 100 ㎝×60 ㎝の楕円形土坑である。特筆すべき出土遺物は無い。

当初、Ｊ９区のＳＤ０３南東部末端でＳＴ０３を確認したが、調査を進めると明確な遺構平面は確認できなかった。この範囲からは、縄文晩期の皿型土器（４５）、石鏃（９４）、磨製石斧（１７４）、円形石製品（２３７・２３８）が出土している。

沢部分では遺構は確認できなかった。出土遺物は打製刃器（１９８・１９９）と青磁皿（２６５）があるが、いずれも覆土からであり、斜面上部からの流れ込みと思われる。

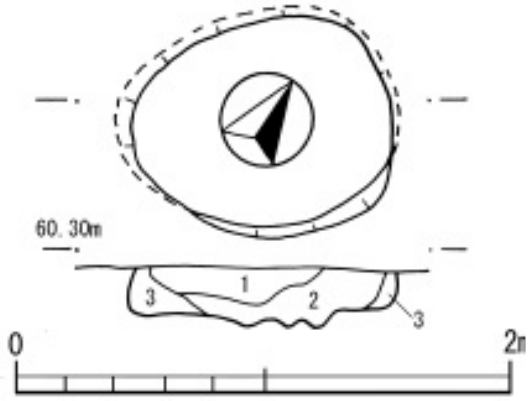


図２４．ＳＸ５９遺構平面図

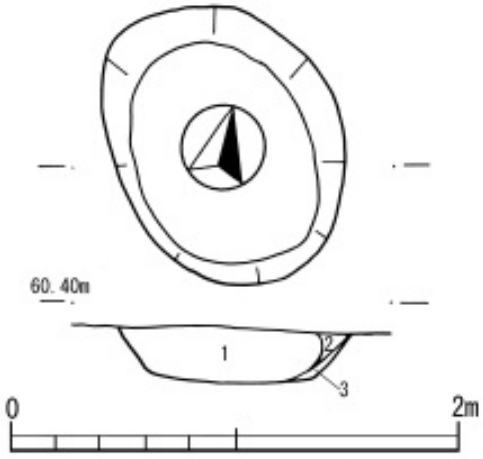


図２５．ＳＸ６２遺構平面図

第３章　出土遺物

土器・土製品

土器は縄文時代晩期の深鉢型土器を中心に出土している。各遺物の計測値等については巻末の計測表を参考されたい。

・深鉢型土器（１～２３）

（１）は縄文早期の赤御堂式と考えられる破片で、内外面に斜縄文が施されている。縄文晩期が主となる本遺跡では早期の遺物出土は本例のみとなる。（２～２３）は晩期の粗製深鉢型土器で、胴部下半や底部を埋設した状態で出土したものが多い。口縁がわずかに内湾し、内外面には炭化物の付着が認められる。

・浅鉢型土器（２４～３１）

（２４）は晩期の鉢型土器で、胴部は斜縄文が施され、口縁部でくびれを持ち、肩部に粘土粒が張り付くものである。（２５）は片口が大きく張り出した晩期の鉢型土器で、外面に厚く炭化物が付着している。（２６）は胴部に斜縄文を、口縁部に横位の沈線により文様を施している晩期の鉢型土器で、口唇部はM字の突起が７単位施されて波状を呈している。（２７）は晩期大洞Ａの浅鉢型土器で、胴部に斜縄文を施した後、胴部上半に横位の沈線文を施し、肩部に４単位の突起を付している。（２８）は外面全体に斜縄文を施した浅鉢型土器で、底部も丸く碗や坏のような形状を呈している。（２９）は晩期の無文の浅鉢型土器であるが、底部を内側から部分的に押し出し、四脚状に加工している。（３０）は口縁部のみの出土で、肩部に大きな突起が付される晩期の鉢型土器で、胴部の斜縄文と口縁部の沈線文ともに緻密で良好な焼成である。（３１）は晩期の浅鉢型土器で、胴部には斜縄文口縁部に沈線と２条の刺突による文様帯を有する。

・台付土器（３２～４４）

（３２）は晩期大洞Ｃ１の台付浅鉢型土器である。概報では碗として報告していたが、整理に当たり台が付くことが判明した。全面に赤色顔料が施されている。（３３）は晩期の台付鉢で胴部に斜縄文を施し、波状口縁を有するものである。（３４）は無文の台付浅鉢型土器で、台上部に隆帯が回るもの。（３５）は晩期大洞Ｃ２の台付（浅鉢）型土器で内面に雲形文が施される。台部の内部をえぐって成形しており、器底部の厚みが４㎜程度と極端に薄くなっている。（３６～４４）台付土器の台部分のみ。無文のものが多いが、沈線を施したもの（３７）も認められる。

・皿型土器（４５～４７）

（４５）は晩期大洞Ｃ２の皿型土器で、外面に雲形文を施している。（４６）は晩期大洞Ｃ２の楕円形を呈し、前面に赤色顔料を塗布した皿型土器で、概報で報告済みのものである。（４７）は晩期の無文皿型土器で、内外面に赤色顔料を塗布した痕跡が残る。

・壺型土器（４８～６１）

（４８）は球状の胴部に斜縄文を施した壺型土器。（４９）は卵形の無文の壺型土器。（５０）は胴部に斜縄文を施した肩部が張る壺型土器。（５１）は無文の壺型土器。（５２）は小型で無文の壺型土器で袖珍土器よりは大きいものの、今回の調査では最小の壺型土器である。（５３）は胴部全体に斜縄文を施し、肩に最大径を持ち底部の小さな壺型土器。（５４・５５）は小型の無文壺型土器。（５６）は概報で報告済みであるが、報告済みであるが波状口縁と肩部に隆帯による文様を付した大型の壺型土器である。（５７）は全面に赤色顔料を塗布した痕跡の残る無文の算盤玉状の壺型土器である。（５８）は胴部に斜縄文を施した

小型の壺型土器。（５９）は卵形の高さ29.4㎝を測る比較的大きな壺型土器で、胴部全面に斜縄文を施している。（６０）は壺型土器の頚部であるが、口縁に向かいすぼまる形状で、波状口縁と粘土粒の貼り付けを施している。（６１）は無文の広口壺型土器である。

・注口土器（６２・６３）

２点出土しておりともに注口土器の注ぎ口部分である。

・袖珍土器（６４～７２）

（６４）は注口土器である。胴部に雲形文を模したと思われる沈線文が施されている。（６５・６９・７１・７２）は台付土器である。（６６）は深鉢型土器で、口縁部に刺突列による文様を施している。（６７）は無頚壺、（６８）は壺型土器である。（７０）は深鉢型土器と思われる。

・土偶・土製品（７３～８５）

（７３・７８・８０）は土偶の脚部と思われる。（７４）は頭部の欠損した土偶である。前面に乳房状の突起が付され、前面と背面に沈線により文様が施されている。（７５）は土偶胴部と思われる。前面に上下方向の刺突列よる文様が施されている。（７６・７７）は土偶の腕部である。（７９・８２）は土偶の脚部としたが、キノコ状土製品や土馬等の可能性も考えられるものである。（８１）は土偶の脚部としたが小片であり確証はない。（８３）は全面に赤色顔料を施した耳飾り状土製品である。一方の端部を刻みにより細かな花形状としている。（８４・８５）は土器転用の円形土製品である。

石器・石製品

石器・石製品についても、土器・土製品同様に後述の計測表にてスケールを報告している。

・石鏃（８６～１４０）

（８７・１３１）など石鏃としては比較的大型の尖頭器についても便宜上ここで報告するものとした。形態的に特徴のあるものとしては、無柄のものとして（９４・１２５）がある。また、同じく無柄で返し部分が作り込まれていない棒状の石鏃（１２３・１２６・１３９）がある。（１１３）は魚様の形状をしており、先端形状も錐状ではなく薄刃の刃物状となっているもので、アメリカ型石鏃に分類しても良いと思われる。また、返し部分が外反するような反りの強い三角形を呈するもの（１１４・１３３）も出土している。なお、（１００・１３２）は石鏃に分類したが、石錐の可能性も考えられるものである。

・石錐（１４１～１４８）

（１４１）はサイズ、形態ともに他と異なるため、後述する（２５４）同様に不明石製品と分類することも考慮したが、欠けた一端が錐状に延びる可能性が高いため石錐として報告する。（１４６）は錐部分のみと解し、本項で報告する。

・石匙（１４９～１５４）

石匙は横型のもの（１４９・１５０・１５３）と縦型のもの（１５１・１５２・１５４）の６点が出土した。

・石箆（１５５～１６３）

石箆は、石器作成時に打点以外の辺に剥離による刃部を付しているものとした。したがって、円形を呈する石器もここに含み報告する。（１５５・１５６・１５９・１６３）は剥片を刃部の剥離のみで石器としたものであり、石箆とすべきではないかもしれない。

・ナイフ形石器（１６４～１７１）

剥片の２辺を剥離による刃部としたもので、石篦よりも鋭利な先端を有する石器をここに分類した。

・磨製石斧（１７２～１８４）

磨製石斧と思われる遺物は報告した遺物以外にも出土しているが、ここでは残存部分の大きな遺物のみを報告する。

（１７２・１８２）は６㎝程度の比較的小さな石斧、（１７５）は刃の摩耗が著しいものである。

・打製石斧（１８５・１８６）

（１８５）は石材への加工を最小限として作成した石斧、（１８６）は剥片を方形に剥離加工した石斧である。

・打製刃器（１８７～２０４）

打製刃器は剥片に対しいずれかの辺に剥離による刃部を造作したものとした不定形の石器である。

・石皿（２０５～２１０）

石皿と思われる遺物は報告した遺物以外にも出土しているが、ここでは残存部分の大きな遺物のみを報告する。（２０５）は完形で出土した石皿である。底面への加工は施していない。（２０６）は使用面の摩耗が著しい。（２０７）は使用面のうち中心部の摩耗が著しく窪みとなっている。（２１０）は使用面が平面となっている。この形状の破片は１点のみであった。

・磨石（２１１～２１６）

（２１１）は１面が特に摩耗し、平面となっているもの。（２１４）は側面のうち１面が摩耗して平面となっているものである。（２１６）は全面に赤色顔料が付着しており、弁柄等を磨ったものと思われる。

・たたき石（２１７～２２３）

（２１９・２２０）は２面に使用痕（窪み）が見られるものである。

・石棒（２２４～２３２）

石棒として全形が判別できる遺物は出土しなかった。（２２５・２２９）は石棒の頭部（端部）である。（２２４・２２８・２３０・２３２）も端部である。（２２６）は断面形が菱形となるものである。

・円形石製品（２３３～２４９）

概報では「円盤状石製品」として報告した遺物である。直径６㎝前後のものが多いが、（２４０）のような直径 10 ㎝ほどのものや、（２４６）のように直径５㎝に満たないものも出土している。

・三角形石製品（２５０）

１点のみの出土で、三角形の頂点を打ち欠いている。

・不明石製品（２５１～２５６）

（２５１）は滑石に２か所の窪み穴を付している。破片であるため全体形は不明である。（２５２）は長楕円形で成形痕か使用痕か不明な磨り跡が見られる。（２５３）は磨製石器であり長辺の１辺を刃部のように薄く加工しており、使用の痕跡も認められる。（２５４）は石錐の種類かもしれないが、全体形・使用方法ともに不明である。（２５５）は三角形の断面を有する磨製石器であるが、全体形・使用方法ともに不明である。（２５６）は１面を平面に加工したもので、平面化した面以外の表面に窪み穴と刻線が認められる。

平安時代以降の遺物

・須恵器（２５７）

須恵器の出土は少なく、甕の破片及び坏である。（２５７）は糸切底で火襷の付いた坏である。

・土師器（２５８～２６４）

甕（２５８～２６０）、坏（２６１～２６４）など、１０世紀前半を中心とした時代の遺物が出土している。（２５８・２６０）は底部のみ。（２５９）は口縁が外反し、表面の調整が良好な甕である。（２６１）は内面黒色処理をした糸切底の坏であり、胴部下半（底部近く）に刻線による文様が施されている。文様が何を表したものか解読できなかった。（２６２・２６４）は手捏ね成形の坏。（２６３）は回転糸切底の坏である。

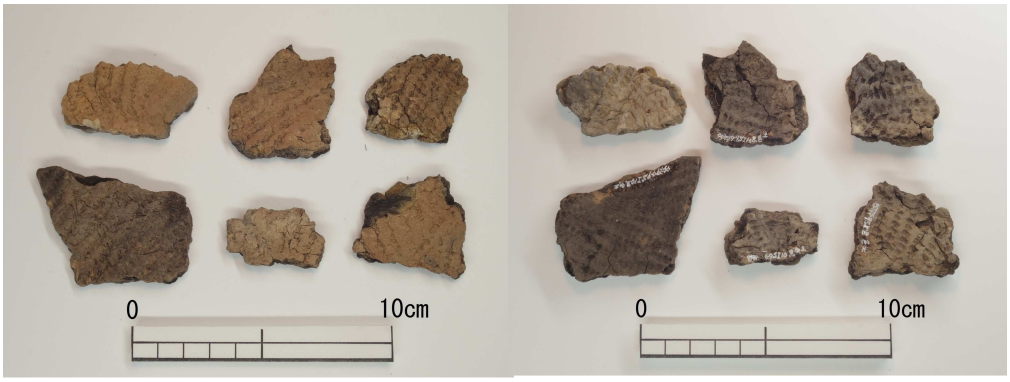
・陶磁器（２６５～２７３）

陶磁器は中近世の舶載、国産のものがあり、いずれも出土量がきわめて少ない。１６世紀以前の遺物は、（２６５）が青磁皿の高台部で見込みに印花文が施されている。（２６６）は青白磁皿の破片と思われる。（２６７）は染付腕の破片である。（２６８）は産地不明の瓦質の擂鉢である。１７世紀以降の遺物は、（２６９・２７０）は唐津の皿と思われる。（２７１）は越前系の擂鉢である。（２７２・２７３）は伊万里の小碗である。

その他（２７４）

銭貨（２７４）は寛永通宝である。

1



2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

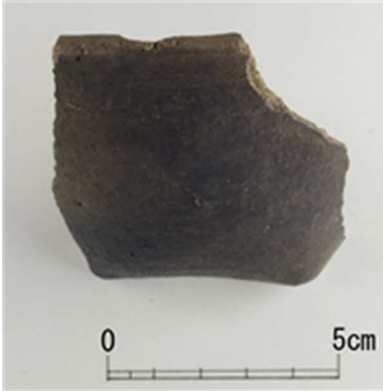
25

26

27

28

29



30

31

32

33

34

35

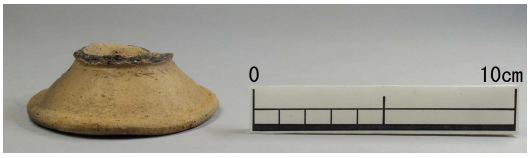
0 5cm

36

37

38

39



40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

50

51

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

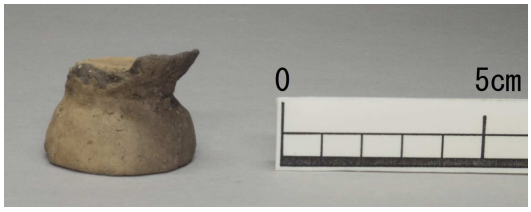
0 10cm

62

63

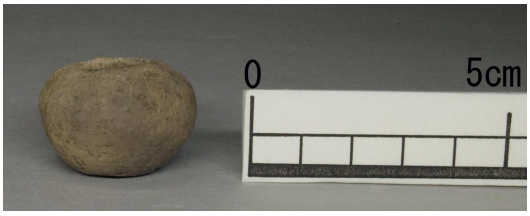
64

65

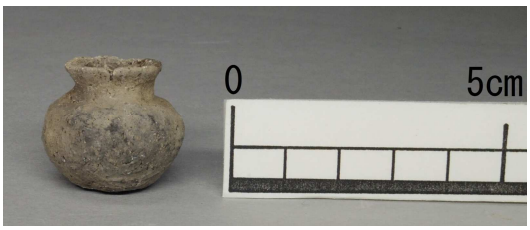


66

67

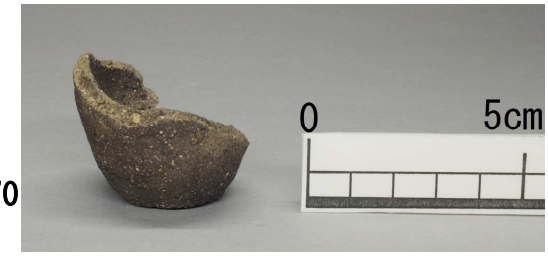


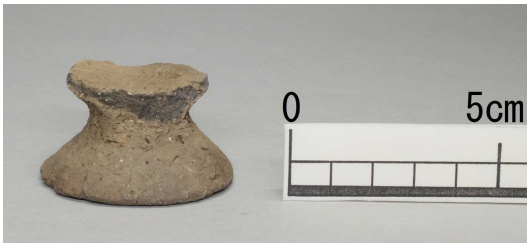
68



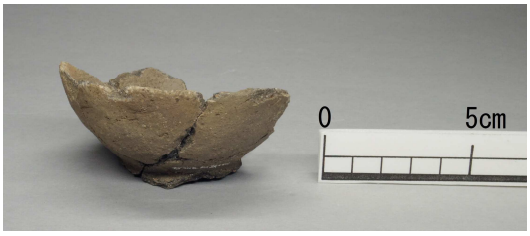
69

70



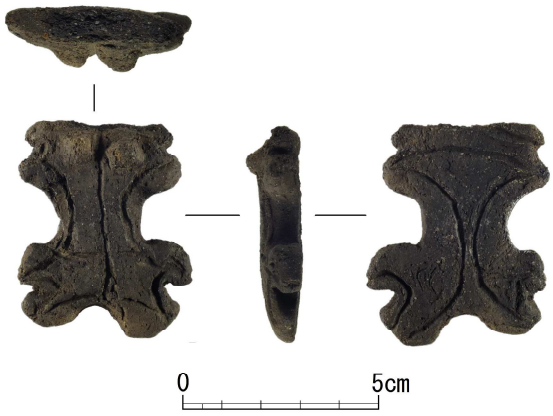


71



72

73



74

75

76

77

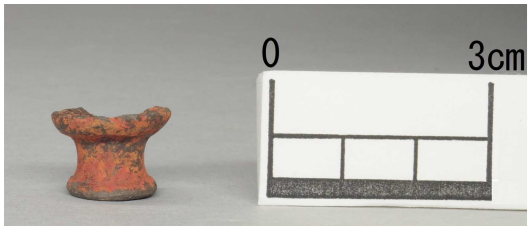
78

79

80

81

82



83

84

85

86

0 5cm

87

0 5cm

88

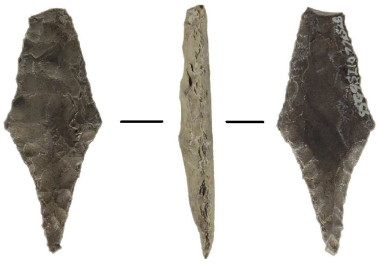
0 5cm

89

0 5cm

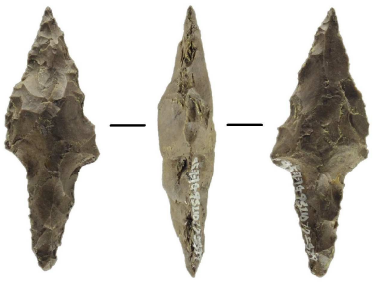
90

0 10cm



91

0 5cm



92

0 5cm

93

0 5cm

94
0
5cm

95
0
5cm

96
0
5cm

97
0
5cm

98
0
5cm

99
0
5cm

100
0
5cm

101
0
5cm

102

103

104

105

106

107

108

109

110
0
5cm

111
0
5cm

112
0
5cm

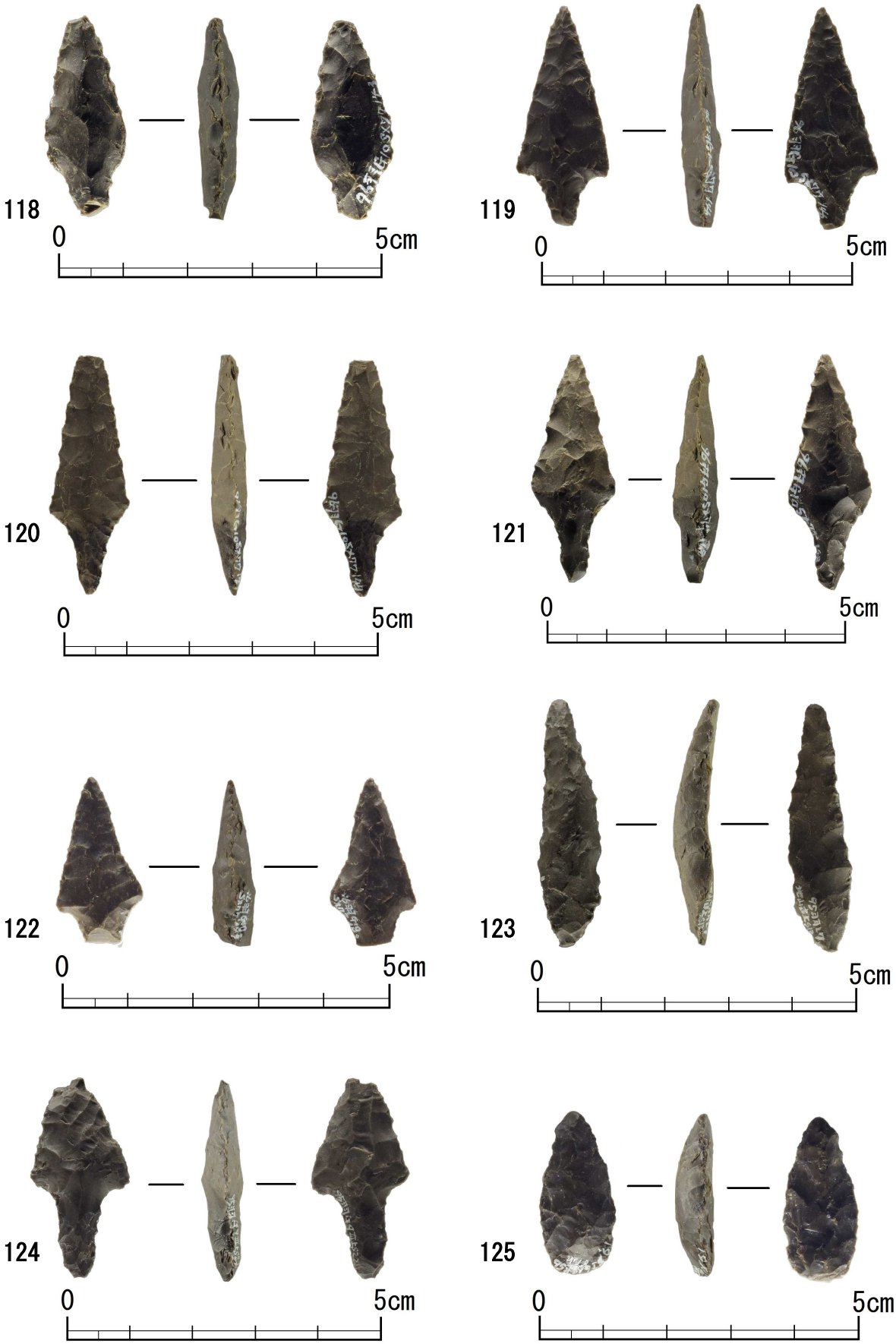
113
0
5cm

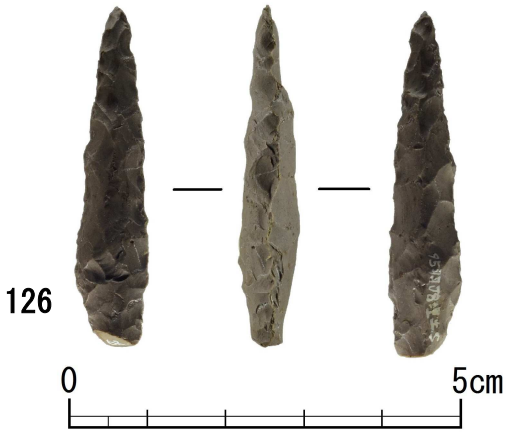
114
0
5cm

115
0
5cm

116
0
5cm

117
0
5cm


118
0
5cm
119
0
5cm
120
0
5cm
121
0
5cm
122
0
5cm
123
0
5cm
124
0
5cm
125
0
5cm

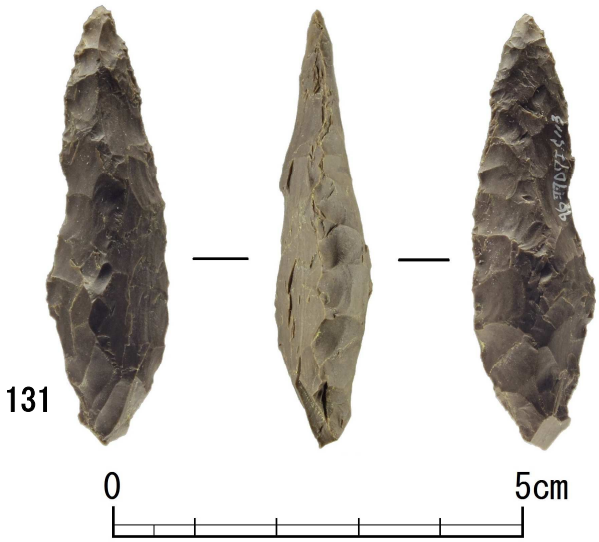

126
0
5cm

127
0
5cm

128
0
5cm

129
0
5cm

130
0
5cm


131
0
5cm

132
0
5cm

133
0
5cm

134
0
5cm

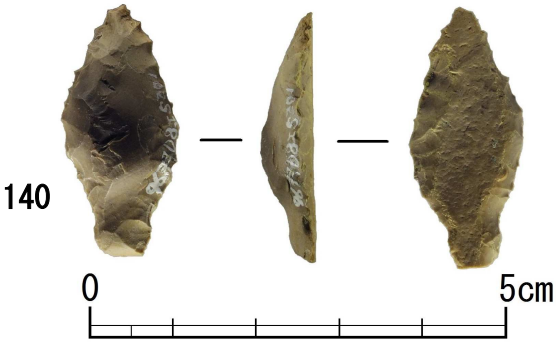
135
0
5cm

136
0
5cm

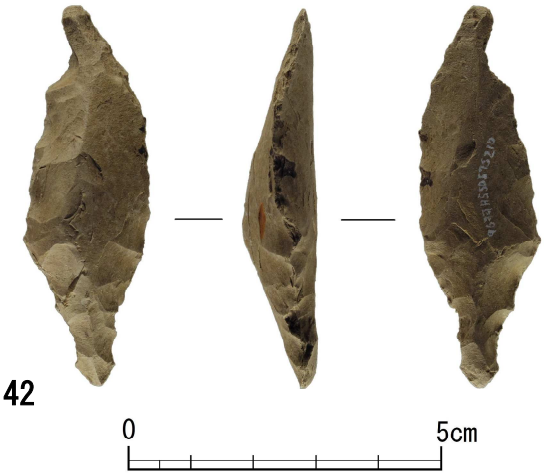
137
0
5cm

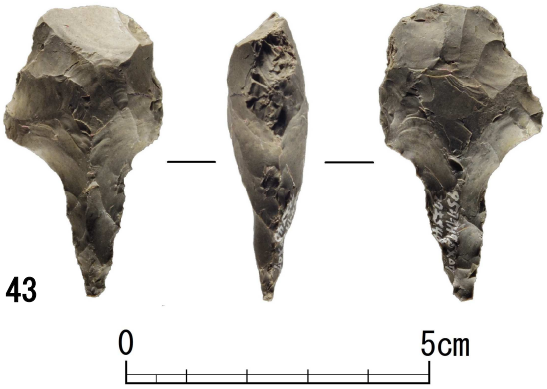
138
0
5cm

139
0
5cm


140
0
5cm

141
0
5cm


142
0
5cm


143
0
5cm

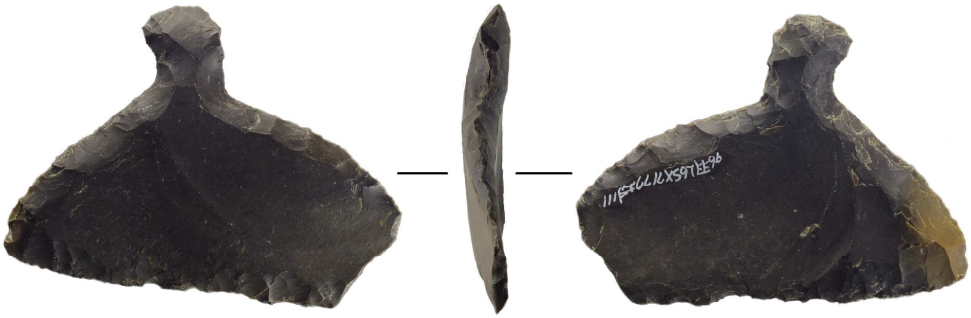
144
0
5cm

145
0
5cm

146
0
5cm

147
0
5cm

148
0
5cm



149 0 5cm

150 0 5cm

151 0 5cm

152 0 5cm

153

0 5cm

154

0 5cm

155

0 5cm

156

0 5cm

157

0 5cm

158

0 5cm

159

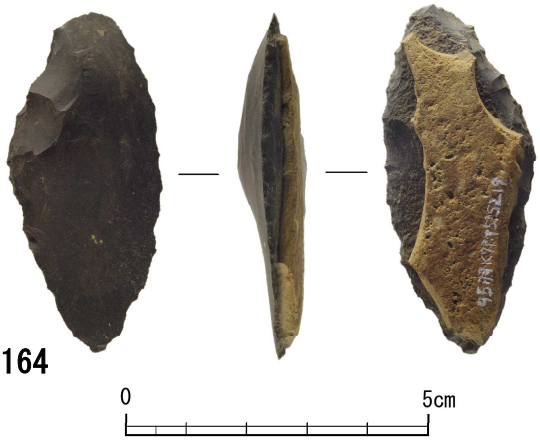
0 5cm

160 0 5cm

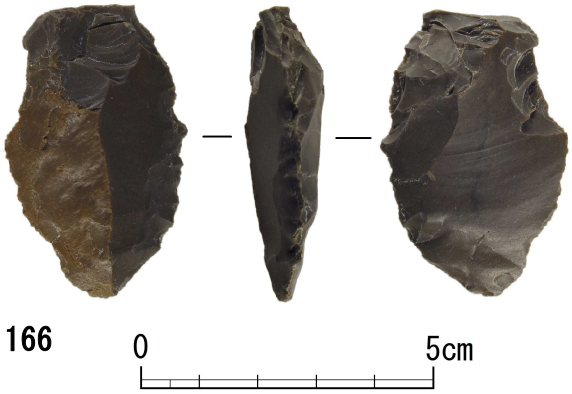
161 0 5cm

162 0 5cm

163 0 5cm


164
0
5cm

165
0
5cm


166
0
5cm

167
0
5cm

168
0
5cm

169
0
5cm

170
0
5cm

171
0
5cm

172 0 5cm

173 0 10cm

174 0 10cm

175

176

177

178

179

180

181

182

183

184

185

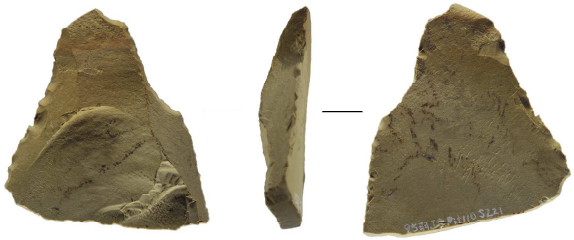
186

187

0 10cm

188

0 5cm



189

0 5cm

190

0 5cm

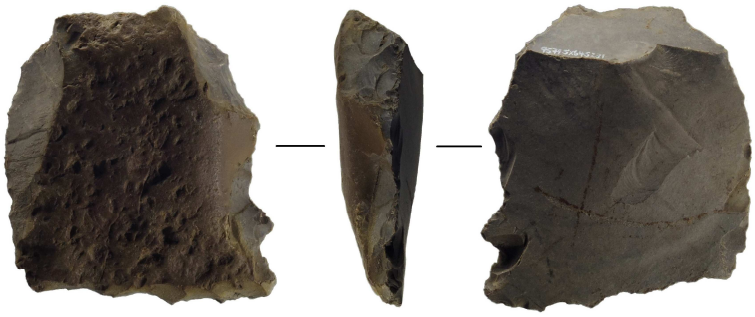
191

0 5cm

192

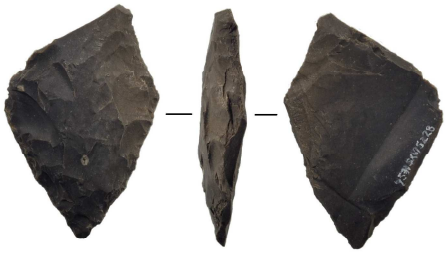
0 10cm

193 0 5cm



194 0 5cm

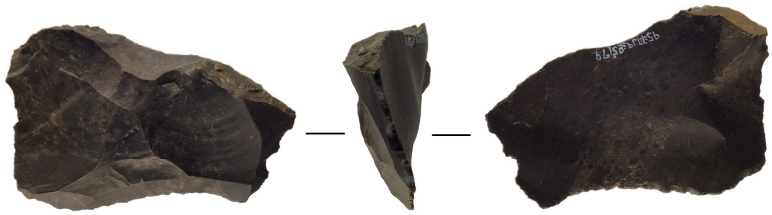
195 0 10cm



196 0 5cm

197 0 5cm

198 0 5cm



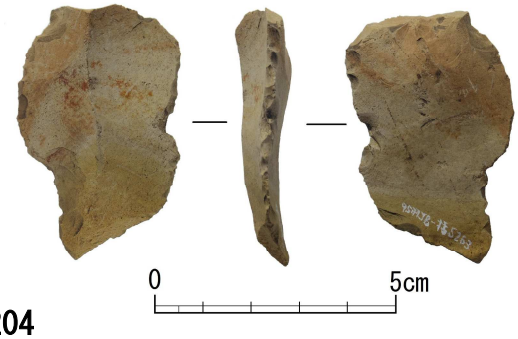
199 0 5cm

200 0 5cm

201 0 5cm

202 0 5cm

203 0 5cm

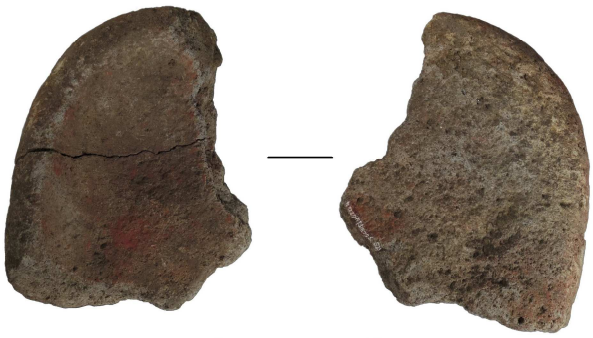


204 0 5cm

205

0 10cm

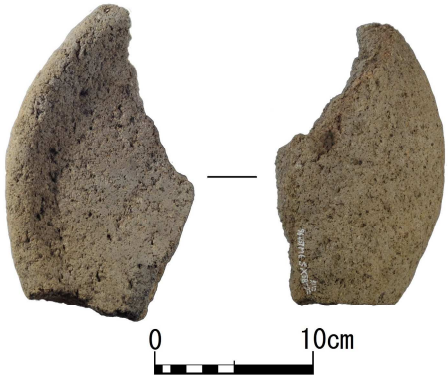
206



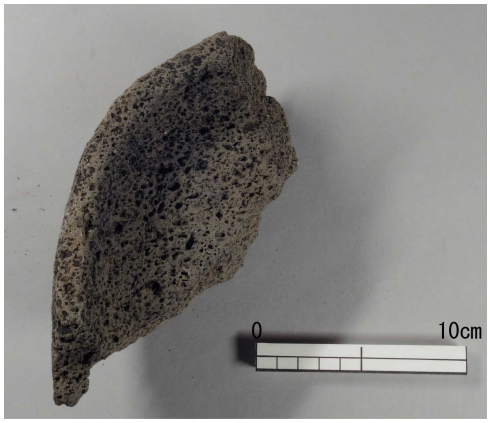
0 10cm

207

0 10cm



208



209

210

211

0 10cm

212

213

214

215

216

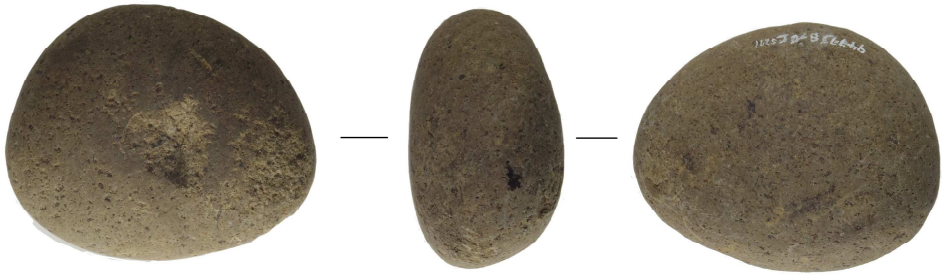
217

218

219

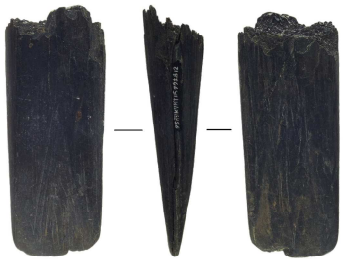
220

221

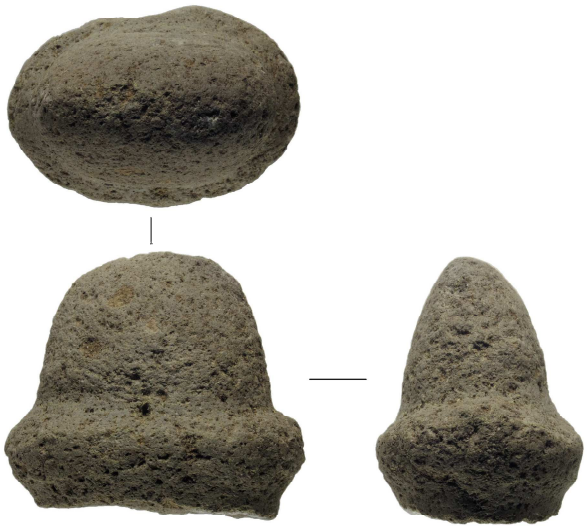


222

223

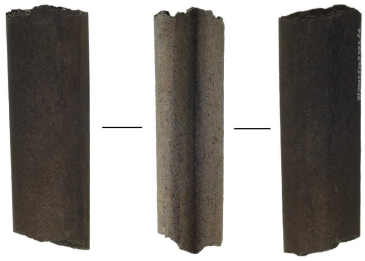


224 0 5cm



225 0 10cm

226 0 10cm

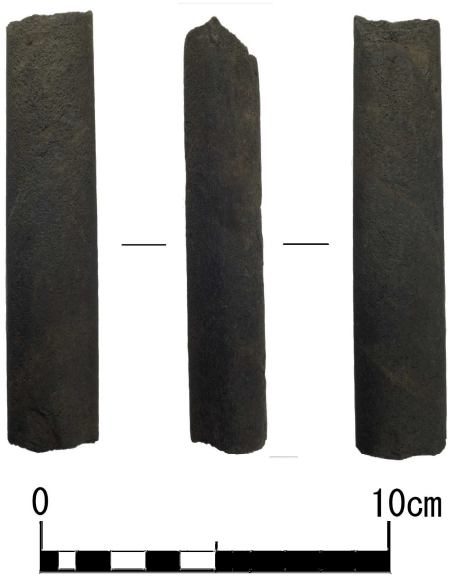


227 0 5cm

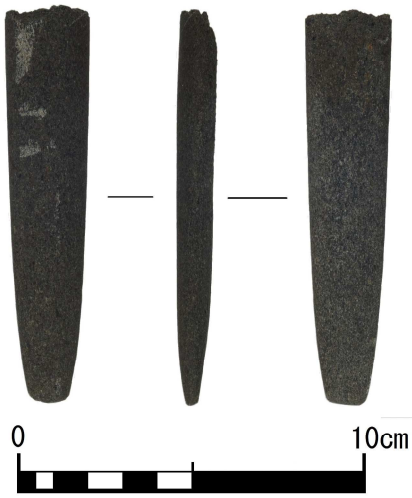
228 0 5cm

229 0 10cm

230



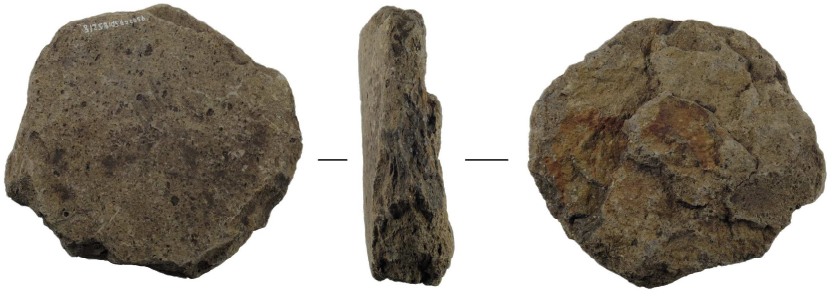
231



232

233

234



235

236

237

238

239

0 10cm

240

0 10cm

241

0 10cm

242

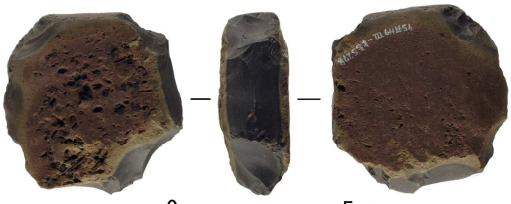
0 10cm

243

0 10cm

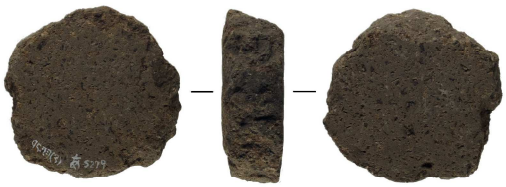
244

0 5cm



245

0 5cm



246

0 5cm

247

0 5cm

248

0 5cm

249

0 5cm

250

0 5cm

251

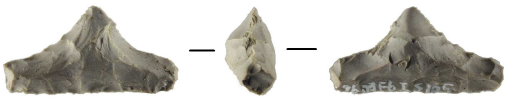
0 5cm

252

0 10cm

253

0 5cm



254

0 5cm

255

0 5cm

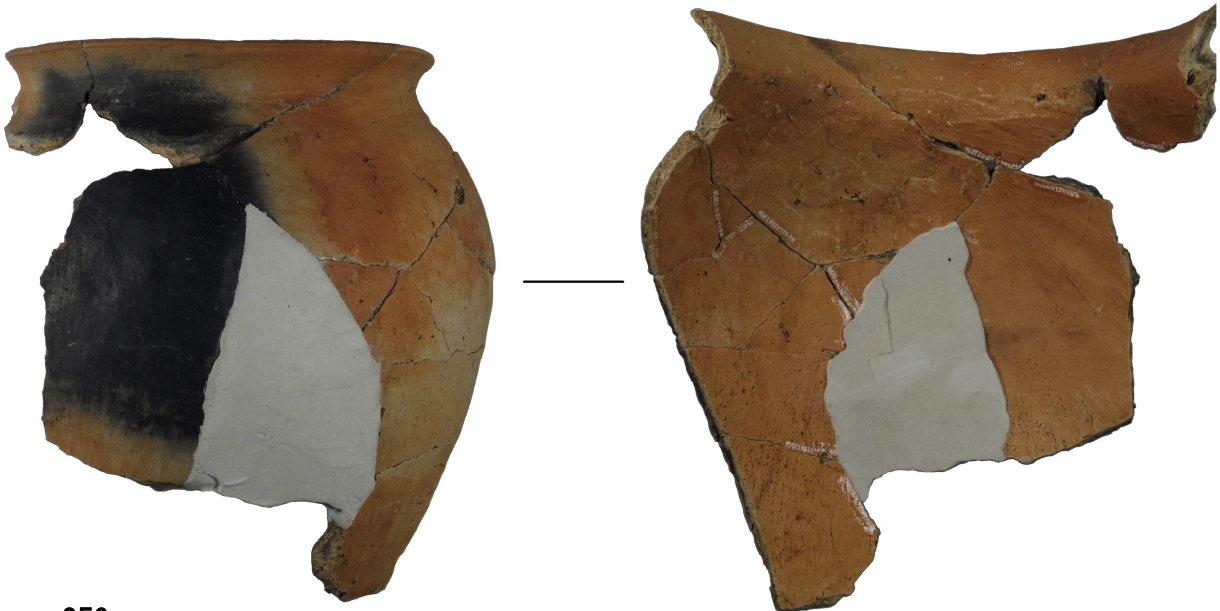
256

0 5cm

257

0 10cm

258

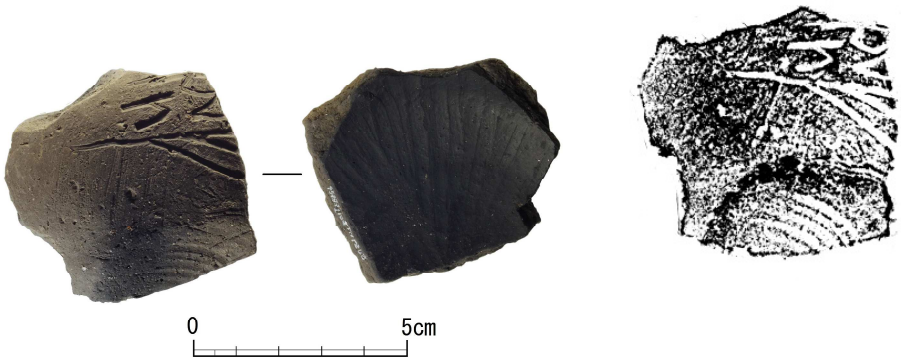


259

0 10cm

260

261

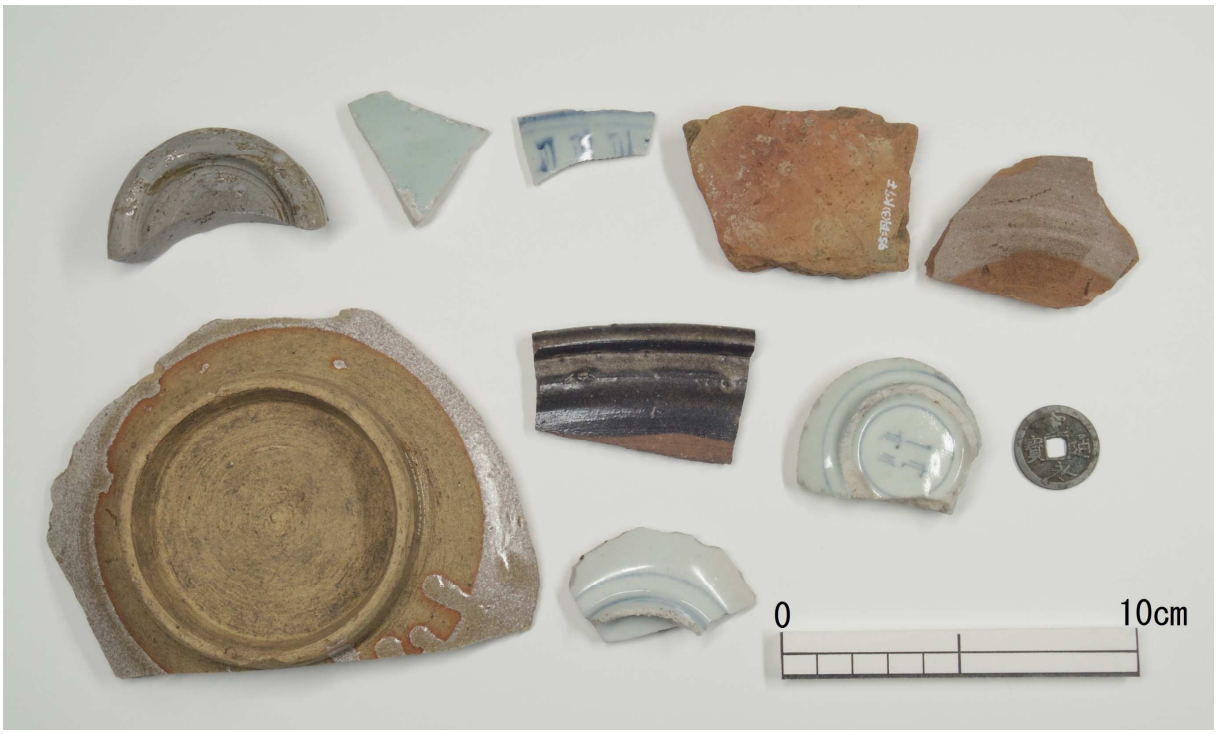


262

263

264

265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
0
10cm


0
10cm

第４章　まとめ

今回の調査は、浪岡町の「美人川再生事業」に伴い実施した緊急発掘調査事業であった。史跡浪岡城跡の環境整備事業（ふるさと歴史の広場事業）と並行することとなったため、調査のスタートである試掘調査を教育委員会職員ではなく、担当できる能力のある他部局の町職員で実施し、２年目からは急遽新規職員を採用・配置するなど、異例の調査体制となった。

このなかで、調査図面等資料の不備もあり、報告書としては十分なものとなっていないことを反省し、今後の自戒としたい。

さて、本調査では羽黒平（３）遺跡が縄文晩期を主とする良好な遺構・遺物を包含していることが改めて確認できた。

青森県立郷土館に所蔵されている「風韻堂コレクション」の中に本遺跡出土の土器が含まれているが、今回の調査では、破片資料ではあるがそれらに劣らない資料が確認できた。遺跡内南側の水田所有者によると「昔は用水堰を掘り直すと土器がゴロゴロと出てきた。」との聞き取りもあり、沢部分の調査に期待したが、実際は全く遺構・遺物ともに検出できなかった。

ともあれ、河岸段丘上の今回の調査区においても、竪穴構造ではない直径 10m程の円形住居跡や、多数のフラスコ状ピット、土坑など、特色ある遺構が検出できた。また、遺物についても、晩期（大洞Ｃ１、Ｃ２）を主とする良好な土器が出土している。石器についても、多数の剥片の検出や、各種石器の出土、報告書では掲載しなかったが、母岩や剥離痕のある石材が多数出土しているなど、縄文時代晩期の生活を彷彿させるような調査となった。

なお、本遺跡についてこれまで発掘調査を行っていなかった。今回の開発に係る調査では、築山等盛り土により保護される部分については実施していないが、出土遺構・出土遺物ともに縄文時代晩期の良好な遺跡であることが確認できた。このことから、今後の開発等の遺跡改変に関する情報について積極的に聴取し、適時、発掘調査による記録保存を行う必要がある。

表１．出土縄文土器計測表

図版No.	遺物名	法量			重量	出土遺構	遺物番号	特徴
		縦	横	高さ(厚さ)				
1	深鉢型土器					SI10	P-	赤御堂式土器
2	深鉢型土器		(25.0)	(27.8)		SM01	P019	
3	深鉢型土器		(19.7)	24.2		SM04	P259	
4	深鉢型土器		(14.8)	(5.7)		SM05	P262	底部のみ
5	深鉢型土器		(11.9)	(4.9)		SM05	P263	底部のみ
6	深鉢型土器		30.6	(41.3)		SM07	P251	
7	深鉢型土器		22.8	(22.7)		SM07	P252	
8	深鉢型土器		(28.0)	(21.0)		SM07	P253	
9	深鉢型土器			(14.0)		SM07	P254	
10	深鉢型土器		(28.0)	(28.5)		SM08	P256	
11	深鉢型土器		(29.2)	(25.9)		SM09	P077A	
12	深鉢型土器		(24.5)	(21.5)		SM09	P077B	
13	深鉢型土器		(19.5)	(16.7)		SM11	P075A	
14	深鉢型土器		(17.0)	(16.5)		SM12	P255	
15	深鉢型土器		(20.5)	(16.6)		SM13	P258	
16	深鉢型土器		(26.5)	(20.0)		SM14	P087	
17	深鉢型土器		(20.0)	(22.5)		SM21	P261	
18	深鉢型土器		(21.5)	(20.8)		SM22	P257	底部なし
19	深鉢型土器		(24.8)	(25.5)		ST04	P086	
20	深鉢型土器		20.8	(23.3)		SX07	P073	底部なし
21	深鉢型土器		21.6	(203.0)		SX21	P025	底部なし
22	深鉢型土器		(17.0)	10.4		SX29	P027	底部のみ
23	深鉢型土器		(21.0)	(16.0)		SX54	P260	
24	鉢型土器		(15.0)	11.8			P213	
25	片口付鉢型土器			(10.0)			P099	表面に炭化物付着
26	鉢型土器		16.3	16.1		Pit501	P207B	
27	浅鉢型土器		15.4	7.6		SX56	P221	
28	浅鉢型土器		13.1	5.4		Pit230	P036	
29	浅鉢型土器			5.3		SX22	P272	四脚付土器
30	浅鉢型土器		(16.8)	(4.8)			P068	口縁部のみ
31	浅鉢型土器		(14.4)	(8.7)			P209	
32	台付浅鉢型土器		20.7	12.1		SX07	P031,034,069	全面赤色塗布
33	台付鉢型土器		15.6	12.7		SX07	P061	
34	台付浅鉢型土器		(9.0)	(4.1)		SI10	P273	無文、台部に隆帯有
35	台付浅鉢型土器		(6.0)	(1.1)			P103	内面に雲形文、高台を内刳、器底部厚が４㎜程度

36	台付土器		(8.9)	(4.4)		Pit 一括	P218	台のみ
37	台付土器		(6.9)	(3.7)		Pit066	P249	台のみ
38	台付土器		4.8	(3.7)		ST02		
39	台付土器		(7.9)	(2.7)		SX07	P266	台のみ
40	台付土器		(8.2)	(4.1)		SX20	P264	台のみ
41	台付土器		(6.8)	(3.7)		SX20	P265	台のみ
42	台付土器		(11.4)	(4.1)			P230	台のみ
43	台付土器		(5.7)	(3.0)			P281	
44	台付土器		(6.8)	(3.7)			P284	
45	皿型土器		(20.0)	(2.3)		ST03	P049,050	外面雲形文
46	皿型土器	24.5	21.5	8.0		SX07	P58	概報にて報告済
47	皿型土器		(19.0)	(5.0)			P083	無文、全面赤色顔料塗布
48	壺型土器		16.0	(14.3)		Pit 一括	P216	
49	壺型土器		12.4	(17.5)		Pit001	P012	底部なし
50	壺型土器		19.3	(12.6)		SM11	P075B	
51	壺型土器		(15.8)	(8.6)		ST02	P	頚部から上欠損
52	壺型土器		6.8	9.1		ST02	P021	
53	壺型土器		17.3	22.0		ST02	P022	
54	壺型土器		9.8	(9.7)		ST02	P024A	
55	壺型土器		9.4	10.9		ST02	P035	
56	壺型土器					SX07	P041	大型土器
57	壺型土器		12.4	10.7		SX29	P026	
58	壺型土器		9.9	10.8		SX29	P088	
59	壺型土器		(21.3)	29.4		SX29	P092	
60	壺型土器			(8.8)			P285	口縁部のみ
61	広口壺型土器		(14.6)	(7.2)		SI10	P274	無文
62	注口土器	(5.4)	(4.8)	(2.1)		SD15	P020	口縁部のみ
63	注口土器	(3.1)	(3.6)	(2.5)		SI10	P275	口縁部のみ
64	袖珍土器		4.6	4.2		Pit064	P032	注口土器
65	袖珍土器		(4.0)	(2.9)		SX22	P271	台付土器
66	袖珍土器		4.1	5.5			P034	深鉢型土器、頚部刺突列有
67	袖珍土器		3.1	2.2			P098	無頚壺状土器
68	袖珍土器		2.7	2.4			P102	壺型土器
69	袖珍土器		(5.0)	(2.8)			P223	台付土器
70	袖珍土器		(4.4)	(3.6)			P240	深鉢型土器の底部のみ
71	袖珍土器		(5.0)	(2.6)			P280	台付土器
72	袖珍土器		(8.0)	(4.4)			P283	台付浅鉢型土器
73	土偶	(3.9)	(2.3)	(1.9)		Pit066	P250	脚部のみ

74	土偶	(5.4)	4.4	1.3	(23.94)	SX07	P072	頭部欠損
75	土偶	(5.8)	(5.1)	(2.8)	(81.99)	SX22	P269	胴部のみ
76	土偶	(4.2)	(3.6)	(1.4)			P003	腕部のみ
77	土偶	(3.0)	(2.4)	(1.5)			P085	腕部のみ
78	土偶	(3.8)	(2.3)	(1.6)			P210	脚部のみ
79	土偶	(3.4)	(1.5)	(1.5)			P237	脚部(土馬・きのこ型土製品？)
80	土偶	(2.2)	(2.4)	(2.4)			P244	脚部のみ
81	土偶	(1.5)	(0.9)	(0.7)			P278	脚部のみ
82	土偶	(3.3)	(1.1)	(1.2)			P279	脚部のみ
83	耳飾り状土製品		1.7	1.2		SX76	P238	穿孔有
84	円形土製品	3.3	3.4	0.8		SX07	P267	
85	円形土製品	3.1	3.2	0.7			P282	

表２．出土縄文石器計測表

図版No.	遺物名	法量			重量	出土遺構	遺物番号	特徴
		縦	横	高さ(厚さ)				
86	石鏃	(2.1)	0.9	0.4	(0.67)	Pit 一括	S108	
87	石鏃	5.7	1.9	1.3	10.85	Pit175	S032	
88	石鏃	(2.3)	(1.7)	(1.4)	(1.14)	SD18	S214	
89	石鏃	(3.1)	1.2	0.4	(1.29)	SD18	S215	
90	石鏃	(2.7)	1.5	0.6	(1.66)	SD60	S103	
91	石鏃	(3.3)	1.3	0.4	(1.28)	SI10	S028	
92	石鏃	3.6	1.3	0.8	1.75	SI10	S029	
93	石鏃	(2.3)	1.3	0.4	(0.88)	SI10	S145	
94	石鏃	2.1	1.5	0.3	1.06	ST03	S205	
95	石鏃	(2.6)	1.5	0.5	(1.45)	SX03	S242	
96	石鏃	(1.5)	(1.1)	(0.3)	(0.34)	SX07	S001	
97	石鏃	(4.0)	1.8	0.4	(1.67)	SX07	S002	
98	石鏃	(2.4)	1.2	0.4	(0.96)	SX07	S005	
99	石鏃	(3.0)	1.6	0.6	(1.92)	SX07	S008	
100	石鏃	(3.3)	1.3	0.7	(2.66)	SX07	S034	
101	石鏃	(3.0)	1.2	0.4	(1.26)	SX29	S019	
102	石鏃	3.3	1.6	0.8	2.50	SX29	S025	
103	石鏃	2.5	1.2	0.3	0.71	SX35	S136	
104	石鏃	4.2	1.3	0.5	2.00	SX60	S116	
105	石鏃	(3.0)	1.1	0.7	(1.58)	SX76	S144	
106	石鏃	3.1	1.3	0.5	1.50	SX76	S150	
107	石鏃	3.9	1.3	0.5	1.82	SX76	S151	

108	石鏃	3.5	1.4	0.6	1.96	SX76	S152	
109	石鏃	(3.5)	1.3	0.6	(2.15)	SX76	S153	
110	石鏃	(3.2)	1.5	0.7	(2.18)	SX76	S154	
111	石鏃	(2.5)	1.7	0.5	(1.97)	SX76	S155	
112	石鏃	(4.0)	1.2	0.7	(2.24)	SX76	S157	
113	石鏃	2.8	1.7	0.8	3.23	SX77	S020	アメリカ式石鏃？
114	石鏃	(3.0)	1.7	0.9	(2.46)	SX77	S139	
115	石鏃	(2.8)	1.1	0.5	(1.29)	SX77	S140	
116	石鏃	(3.4)	1.2	0.5	(1.72)	SX77	S141	
117	石鏃	3.1	1.2	0.6	1.32	SX77	S142	
118	石鏃	(3.1)	1.3	0.6	(2.17)	SX77	S143	
119	石鏃	(3.6)	1.5	0.6	(2.16)	SX77	S146	
120	石鏃	(3.8)	1.2	0.6	(1.82)	SX77	S147	
121	石鏃	(3.9)	1.4	0.8	(2.54)	SX77	S148	
122	石鏃	(2.5)	1.3	0.6	(1.45)	SX77	S149	
123	石鏃	3.8	1.0	0.5	1.70		S013	
124	石鏃	(3.2)	1.6	0.7	(2.08)		S022	
125	石鏃	2.5	1.2	0.6	1.84		S061	
126	石鏃	(4.4)	0.9	0.8	(2.73)		S062	
127	石鏃	3.5	1.2	0.6	1.74		S063	
128	石鏃	(4.0)	1.1	0.6	(2.42)		S068	
129	石鏃	(3.8)	1.7	0.5	(2.18)		S104	
130	石鏃	(2.9)	1.3	0.7	(1.86)		S109	
131	石鏃	(5.3)	1.5	1.1	(6.53)		S113	
132	石鏃	(3.4)	1.6	0.9	(4.13)		S114	
133	石鏃	(2.6)	(1.6)	0.4	(0.97)		S115	
134	石鏃	(3.2)	1.4	0.5	(1.71)		S120	
135	石鏃	3.6	1.1	0.5	1.74		S133	
136	石鏃	(2.6)	1.4	0.5	(1.08)		S156	
137	石鏃	(4.3)	1.4	0.5	(2.17)		S170	
138	石鏃	(2.4)	1.1	0.4	(0.83)		S171	
139	石鏃	(3.7)	1.3	0.7	(2.92)		S174	
140	石鏃	(3.1)	1.4	0.7	(2.37)		S201	
141	石錐	(2.1)	(2.1)	(0.6)	(2.37)	Pit065	S227	
142	石錐	(6.0)	2.0	1.1	(7.35)	SD57	S210	
143	石錐	4.6	2.5	1.3	10.08	SX07	S040	
144	石錐	6.0	2.3	1.0	10.10	SX20	S043	
145	石錐	(5.5)	2.7	1.2	(12.21)	SX20	S046	

146	石錐	(2.5)	(0.6)	(0.3)	(0.60)		S048	
147	石錐	(3.2)	(2.7)	(1.4)	(11.57)		S249	
148	石錐	(4.5)	2.8	1.2	(10.31)		S250	
149	石匙	4.8	6.5	0.8	18.93	SX71	S111	
150	石匙	5.5	5.4	0.9	19.07		S006	
151	石匙	6.7	2.9	0.6	14.46		S017	
152	石匙	(3.9)	(4.0)	(1.1)	(12.62)		S159	
153	石匙	3.1	6.2	1.3	18.06		S246	
154	石匙	10.0	3.3	1.1	38.95		S288	
155	石篦	4.4	2.8	1.2	14.62	SI10	S282	
156	石篦	3.6	2.2	0.9	6.31		S248	
157	石篦	6.1	2.5	1.3	17.70	SD55	S212	
158	石篦	6.5	3.0	1.2	22.53	SD55	S213	
159	石篦	4.3	5.4	1.4	33.42	SX20	S233	
160	石篦	4.9	2.8	0.6	7.87		S064	
161	石篦	7.6	3.8	1.0	31.83		S138	
162	石篦	(4.6)	3.4	1.3	(21.61)		S245	
163	石篦	4.7	4.0	1.1	21.70		S247	
164	ナイフ形石器	5.5	2.5	1.1	11.87	Pit051	S219	
165	ナイフ形石器	4.2	2.4	0.8	7.86	SD18	S216	
166	ナイフ形石器	4.6	3.1	1.2	14.98	ST01	S031	
167	ナイフ形石器	4.6	2.7	1.0	12.05	SX07	S283	
168	ナイフ形石器	4.2	2.1	0.9	7.73	SX20	S259	
169	ナイフ形石器	3.8	2.4	1.0	8.13	SX30	S039	
170	ナイフ形石器	6.2	2.5	0.4	7.84		S251	
171	ナイフ形石器	4.6	3.2	1.1	16.02		S258	
172	磨製石斧	5.6	2.2	1.0	19.28	SD18	S026	
173	磨製石斧	(7.1)	(4.4)	(2.4)	(90.76)	SD52	S211	基部のみ
174	磨製石斧	(10.2)	(5.2)	(2.9)	(271.99)	ST03	S036	
175	磨製石斧	7.7	4.4	2.1	133.04	SX20	S045	刃先の摩耗著しい
176	磨製石斧	(8.5)	4.9	(2.8)	(186.42)	SX27	S033	
177	磨製石斧	(6.9)	(4.5)	(2.4)	(108.45)		S007	
178	磨製石斧	11.2	4.6	2.3	195.82		S024	刃部使用痕有
179	磨製石斧	(7.2)	5.9	(2.7)	(176.88)		S119	
180	磨製石斧	(5.2)	4.2	(1.3)	(47.12)		S125	
181	磨製石斧	(7.6)	(5.2)	(3.6)	(194.60)		S160	
182	磨製石斧	6.1	3.1	1.1	34.12		S202	
183	磨製石斧	7.2	4.1	1.7	66.08		S243	

184	磨製石斧	(13.1)	(4.9)	(2.8)	(223.98)		S244	
185	打製石斧	12.2	5.6	3.3	179.06	SX20	S236	
186	打製石斧	8.5	4.7	2.8	122.62	SX63	S185	
187	打製刃器	6.9	7.4	1.6	52.18	Pit 一括	S225	
188	打製刃器	6.4	3.6	1.1	18.72	Pit002	S223	
189	打製刃器	4.4	4.2	0.7	11.78	Pit110	S221	
190	打製刃器	4.4	3.3	1.3	14.70	Pit138	S220	
191	打製刃器	5.6	2.5	1.3	19.82	SD56	S291	
192	打製刃器	7.0	10.4	2.1	117.14	SX29	S181	
193	打製刃器	(6.1)	3.8	1.2	(27.19)	SX63	S184	
194	打製刃器	6.2	5.3	1.9	62.85	SX64	S231	
195	打製刃器	8.6	5.8	2.0	80.82	SX67	S186	
196	打製刃器	(4.6)	(3.2)	(0.8)	(10.32)	SX67	S228	
197	打製刃器	5.5	4.2	1.4	27.53	SX71	S112	
198	打製刃器	4.8	7.6	1.1	42.14	低地(沢)	S178	
199	打製刃器	3.8	5.8	1.2	24.08	低地(沢)	S179	
200	打製刃器	4.2	2.0	1.3	7.77		S172	
201	打製刃器	(3.4)	(3.2)	(0.8)	(6.70)		S257	
202	打製刃器	4.8	3.0	0.6	10.63		S260	
203	打製刃器	4.1	3.9	0.9	15.67		S262	
204	打製刃器	5.1	3.4	1.1	11.29		S263	
205	石皿	48.7	38.1	11.4	20100	Pit071	S200	重量は100g未満を四捨五入した。
206	石皿	(19.0)	(15.0)	(7.2)	(1996.91)	Pit316	S021	
207	石皿	(11.0)	(13.0)	(7.0)	(1342.96)	SD61	S135	二面に摩耗による深さ 40.0 ㎜程度のくぼみ
208	石皿	(18.0)	(12.0)	(6.5)	(1139.80)	SX58	S110	
209	石皿	(17.0)	(8.0)	(10.0)	(980.60)		S118	
210	石皿	(14.5)	(10.5)	(5.5)	(1094.48)		S266	縁無の石皿
211	磨石	11.1	13.6	8.4	1866.92	Pit204	S038	一面が平滑化
212	磨石	9.5	13.5	6.7	1299.71	Pit411	S037	
213	磨石	8.9	12.1	6.0	1031.63	SX29	S183	
214	磨石	8.4	15.2	5.3	944.55		S121	
215	磨石	9.0	11.8	5.7	919.04		S268	
216	磨石	5.9	5.2	4.1	178.83	SX58	S204	
217	たたき石	7.1	7.2	5.6	389.77	Pit209	S226	一面に穴。深さ 3 ㎜
218	たたき石	9.5	10.3	6.5	714.27	SD18	S030	一面に穴。深さ 10.0 ㎜
219	たたき石	9.4	12.3	5.5	957.02	SX07	S035	二面に穴。深さ 2.0 ㎜、3.5 ㎜
220	たたき石	9.4	9.7	3.2	373.66	SX22	S286	二面に穴。深さ 6.5 ㎜、5.0 ㎜
221	たたき石	8.7	13.1	5.4	859.41		S270	一面に穴。深さ 2.5 ㎜

222	たたき石	6.7	8.2	4.1	315.61		S271	一面に穴。深さ 3.5 ㎜
223	たたき石	7.1	8.5	5.4	425.96		S272	一面に穴。深さ 3.5 ㎜
224	石棒	(6.7)	(2.6)	(1.6)	(33.36)	Pit115	S012	
225	石棒	(7.0)	(7.7)	(5.1)	(275.00)	Pit259	S059	頭部のみ
226	石棒	(5.6)	(4.3)	(2.4)	(71.22)	Pit316	S057	断面ひし形
227	石棒	(6.5)	(2.2)	(1.9)	(47.84)	SX07	S004	
228	石棒	(6.4)	(1.4)	(0.7)	(8.08)	SX07	S047	断面楕円形
229	石棒	(12.3)	(4.4)	(2.7)	(97.06)	SX58	S203	頭部のみ
230	石棒	(9.6)	(3.1)	(1.8)	(85.32)		S051	
231	石棒	(12.1)	(2.4)	(2.2)	(124.66)		S107	
232	石棒	(10.9)	(2.3)	(1.1)	(39.47)		S132	
233	円形石製品	6.2	6.2	1.7	117.65	Pit425	S222	
234	円形石製品	5.8	6.4	2.8	119.78	SD18	S217	
235	円形石製品	7.8	8.4	2.1	166.73	SD18	S218	
236	円形石製品	5.7	6.3	2.0	109.28	SD56	S238	
237	円形石製品	7.6	8.3	4.0	273.39	ST03	S207	
238	円形石製品	8.0	8.2	1.9	165.76	ST03	S208	
239	円形石製品	6.5	6.7	1.7	109.48	SX29	S182	
240	円形石製品	9.4	10.2	4.1	567.92		S273	
241	円形石製品	5.8	6.3	2.6	127.54		S274	
242	円形石製品	6.7	6.7	3.0	207.46		S275	
243	円形石製品	6.8	7.9	2.9	270.77		S276	
244	円形石製品	6.2	6.2	2.2	146.61		S277	
245	円形石製品	5.0	4.9	1.8	61.20		S278	
246	円形石製品	4.8	4.9	1.7	64.47		S279	
247	円形石製品	5.5	6.0	1.7	94.61		S280	
248	円形石製品	6.1	5.9	1.5	81.76		S284	
249	円形石製品	5.1	5.7	1.7	63.68		S285	
250	三角形石製品	5.9	6.1	1.8	100.89		S281	三角形の頂点剥離
251	不明石製品	(6.7)	(5.7)	(1.9)	(36.01)	SI11	S237	
252	不明石製品	11.7	5.5	2.1	219.07	SX20	S009	
253	不明石製品	(7.5)	3.5	0.7	(26.31)		S014	磨製薄刃状、使用痕有
254	不明石製品	(1.4)	(2.8)	0.9	(2.35)		S105	
255	不明石製品	(6.7)	4.4	2.3	(98.12)		S256	断面三角形
256	不明石製品	6.2	5.5	4.0	173.50		S269	一面平面、曲面に刻線有

表３．出土平安時代遺物計測表

図版No.	遺物名	法量			重量	出土遺構	遺物番号	特徴
		縦	横	高さ(厚さ)				
257	須恵器坏					SI11	P056	
258	土師器甕		(29.0)	(21.3)		Pit501	P207A	
259	土師器甕					SI11	P041	
260	土師器甕		(12.9)	(8.6)			P203	
261	土師器坏			(2.5)		SI11	P268	内黒坏、立ち上りに刻文有
262	土師器坏		10.4	6.4			P201	手づくね
263	土師器坏		13.3	6.3			P206	回転糸切り底
264	土師器坏		17.0	6.3		ST02	P024B	手づくね成形

表４．出土中世以降遺物計測表

図版No.	遺物名	法量			重量	出土遺構	遺物番号	特徴
		縦	横	高さ(厚さ)				
265	青磁皿(高台部)		6.2	(2.0)		低地(沢)	P040	見込みに印花有
266	青白磁							内面文様有
267	染付碗							
268	擂鉢							瓦質
269	唐津皿？							
270	唐津皿？							
271	擂鉢							越前系か
272	伊万里小碗							
273	伊万里小碗							
274	銭貨							寛永通宝

表５．ＳＸ６７土層注記表（図７対応）

1	黒色土（7.5YR2/1）に灰白色パミス（10YR8/2）を極小粒状に1%含む。
2	極暗褐色土（7.5YR2/3）に褐色土（7.5YR4/4）を極小粒～大塊状に30%、黒色土（7.5YR2/1）を大塊状に10%含む。

表６．ＳＸ７５土層注記表（図８対応）

1	黒褐色土（10YR3/2）の単層。
2	黒褐色土（10YR3/2）ににぶい黄褐色粘質土（10YR5/4）を中塊状に5%含む。
3	黒色土（10YR2/1）の単層。
4	にぶい明黄褐色粘質土（10YR5/4）の単層。
5	黒色土（10YR2/1）に褐色粘質土（10YR4/4）を小塊状に20%含む。
6	黒褐色土（10YR2/2）に褐色粘質土（10YR4/4）を小塊状に5%、にぶい明黄褐色粘質土（10YR5/4）を小塊状に5%含む。
7	黒褐色土（10YR2/2）に褐色粘質土（10YR4/4）を小塊状に7%、灰黄褐色粘質土（10YR6/2）を小塊状に5%、黄褐色粘質土（10YR5/6）を小塊状に3%含む。
8	黒色土（10YR2/1）の単層。
9	にぶい黄褐色土（10YR4/3）に明褐色粘質土（7.5YR5/8）を小～中塊状に10%、灰黄色粘質土（2.5Y7/2）を小粒～大塊状に3%含む。

表７．ＳＭ０２土層注記表（図１１対応）

1	黒褐色土（5YR2/1）に黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～小粒状に5%含む。
2	黒褐色土（5YR2/1）の単層。
3	黒褐色土（10YR3/2）の単層。

表８．ＳＭ１３土層注記表（図１２対応）

1	黒褐色土（10YR2/2）に黄褐色土（10YR5/6）を極小粒状に5%含む。
2	暗赤褐色土（5YR3/6）に黒褐色土（10YR2/2）を極小粒状に3%含む。
3	黒褐色土（10YR2/2）の単層。
4	黒褐色土（10YR2/2）に褐色土（10YR4/6）を小～大粒状に15%含む。
5	褐色土（10YR4/6）の単層。

表９．ＳＭ０４土層注記表（図１３対応）

1	黒色土（10YR2/1）の単層。
2	黒褐色土（10YR2/2）に明黄褐色土（10YR6/8）を極小～小粒状に3%含む。

表１０．ＳＸ２９土層注記表（図１４対応）

1	黒色土（10YR1.7/1）に黄褐色土（10YR5/8）を極小粒状に1%、炭化物を極小粒状に1%含む。しまり強い。
2	黒色土（10YR1.7/1）に黄褐色土（10YR5/8）を極小粒状に1%、炭化物を極小粒状に1%含む。しまりなく柔らかい。
3	黒色土（10YR1.7/1）に黄褐色土（10YR5/8）を小～大粒状に5%含む。
4	黄褐色土（10YR5/8）に黒色土（10YR1.7/1）を薄い板状に10%含む。

表１１．ＳＸ３３土層注記表（図１５対応）

1	黒褐色土（10YR2/2）の単層。

表１２．ＳＸ７６土層注記表（図１６対応）

1	褐色土（10YR4/4）の単層。
2	黒色土（10YR2/1） に明黄褐色土（10YR6/6）を小粒状に3%含む。

表１３．ＳＸ７７土層注記表（図１７対応）

1	黒褐色土（10YR2/2） に明褐色土（7.5YR5/6）を極小～中粒状に10%含む。
2	黒色土（10YR2/1）に明黄褐色土（10YR6/8）を小～中粒状に3%含む。
3	黒褐色土（10YR2/2）に明黄褐色土（10YR6/6）を小粒～中塊状に15%、明黄褐色土（10YR6/8）を極小粒～小塊状に5%含む。
4	黒褐色土（10YR3/2)に明黄褐色土（10YR6/8）を極小～極大粒状に40%含む。
5	黒褐色土（10YR2/2）に明黄褐色土（10YR6/8）を極小～小粒状に7%含む。

表１４．ＳＦ０１土層注記表（図１９対応）

1	黒褐色土（10YR2/2）に極小粒状の炭化物粒が5%、焼土粒が微量含まれる。非常に柔らかい（もろい）。
2	黒褐色土（10YR2/2）に黄褐色砂質土（7.5YR5/8）の極小～小粒を40%含む。しまり弱い。
3	黄褐色砂質土（7.5YR5/8）の一部が焼け、赤褐色土（5YR4/8）になっている。極小～小粒状の黒褐色土（10YR2/2）が10%程度含まれる。粘性・しまりがある。

表１５．ＳＭ０７土層注記表（図２０対応）

1	黒褐色土（7.5YR2/2）に橙色砂質土（7.5YR6/8）の極小粒を1%、炭化物を極小～小粒状に10%含む。層上には炭化物塊が乗っていた。
2	極暗赤褐色土（5YR2/3）に橙色砂質土（7.5YR6/8）の極小～中粒状に5%、炭化物を極小～小粒状に10%含む。
3	黒褐色土（7.5YR2/2）に橙色砂質土（7.5YR6/8）の極小～大粒を10%、炭化物を極小～大粒状に15%含む。
4	黒色土（10YR2/1）に橙色砂質土（7.5YR6/8）を極小～中粒状に5%、炭化物を極小～小粒状に10%含む。
5	暗褐色土（7.5YR3/4）に橙色砂質土（7.5YR6/8）を極小粒状に30%含む。しまり弱い。

6	黒色土（7.5YR2/1）に炭化物を極小粒状に5%含む。
7	褐色土（10YR4/6）に黒色土（7.5YR2/1）を20%、橙色砂質土（7.5YR6/8）を極小～大粒状に30%、炭化物を極小～小粒状に5%含む。
8	黒褐色土（5YR2/1）に橙色砂質土（7.5YR6/8）を極小粒状に3%、炭化物を極小粒状に5%含む。
9	黒褐色土（10YR2/3）に橙色砂質土（7.5YR6/8）を極小～中粒状に10%、炭化物を極小～小粒状に5%含む。
10	明褐色砂質土（7.5YR5/8）に黒褐色土（10YR2/3）を極小粒状に5%、炭化物を極小粒状に5%含む。しまりなく柔らかい。
11	橙色土（5YR6/8）の単層。
12	黄褐色細砂（10YR5/6）の単層。
13	黒褐色土（5YR2/1）に明褐色砂質土（7.5YR5/8）を極小～小粒状に30%含む。

表１６．Ｐｉｔ７１土層注記表（図２１対応）

1	黒褐色土（7.5YR2/2）に明黄褐色土（10YR6/8）を小粒状に3%、にぶい黄褐色粘土（10YR4/3）を極大粒状に1%、炭化物を極小～小粒状に2%含む。
2	暗褐色土（10YR3/4）に黄褐色土（10YR5/6）を極小粒状に25%、炭化物を極小～小粒状に1%含む。
3	黒褐色土（7.5YR2/2）に明黄褐色土（10YR6/8）を小粒状に3%、炭化物を極小～小粒状に2%含む。
4	明黄褐色土（10YR6/8）に黒褐色土（7.5YR2/2）を極小～小粒状に1%含む。
5	暗褐色土（10YR3/4）に黄褐色土（10YR5/6）を極小～小粒状に30%、炭化物を極小～小粒状に1%、小～大粒状に25%、にぶい黄褐色粘土（10YR4/3）を中板状に2%含む。

表１７．ＳＸ２４土層注記表（図２２対応）

1	黒色土（7.5YR1/2）に黄橙色土（10YR7/8）を極小～中粒状に2%含む。
2	黒色土（7.5YR1/2）に黄橙色土（10YR7/8）を極小～大粒状に30%含む。
3	黄橙色土（10YR7/8）に黒色土（7.5YR1/2）を小～大粒状に5%含む。

表１８．ＳＸ５６・５７土層注記表（図２３対応）

1	褐色土（10YR4/4）に黄褐色砂質土（10YR8/8）を極小～小粒状に5%含む。
2	暗褐色土（10YR3/4）に黄褐色砂質土（10YR8/8）を極小粒状に1%、炭化物粒を極小～小粒状に5%含む。
3	にぶい黄褐色土（10YR4/3）に黄褐色砂質土（10YR8/8）を極小～小粒状に20%、炭化物粒を極小～小粒状に5%、橙色焼土（7.5YR6/8）を極小～小粒状に5%含む。
4	褐色土（7.5YR4/3）に極小～厚い板状の黄褐色砂質土（10YR8/8）を10%、炭化物を小粒状に5%、橙色焼土（7.5YR6/8）を極小～小粒状に5%含む。
5	暗褐色土（10YR3/3）に黄褐色砂質土（10YR7/8）を極小～小粒状に15%含む。
6	暗褐色土（10YR3/3）に黄褐色砂質土（10YR7/8）を極小～小粒状に1%含む。
7	暗褐色土（10YR3/3）に黄褐色砂質土（10YR7/8）を極小～小粒状に1%、小～大粒の石を20%含む。
8	暗褐色土（10YR3/4）に黄褐色砂質土（10YR8/8）を極小～中粒状に10%、炭化物粒を極小～小粒状に1%含む。
9	暗褐色土（10YR3/3）ににぶい黄褐色土（10YR5/3）を極小～大塊状に25%、炭化物を小粒状に5%含む。

表１９．ＳＸ５９土層注記表（図２４対応）

1	黒褐色土（10YR2/3）に橙色砂質土（7.5YR5/8）を極小～小粒状に5%、明赤褐色焼土（2.5YR5/8）を極小～小粒状に1%、炭化物粒を極小～小粒状に1%含む。
2	黒褐色土（10YR2/3）に橙色砂質土（7.5YR5/8）を極小～小粒状に10%、明赤褐色焼土（2.5YR5/8）を極小～小粒状に5%、炭化物粒を極小～小粒状に5%含む。
3	黒褐色土（10YR2/3）と橙色砂質土（7.5YR5/8）との5：5の混層。

表２０．ＳＸ６２土層注記表（図２５対応）

1	黒褐色土（10YR3/2）ににぶい黄橙色砂質土（10YR7/4）を極小～大粒状に5%、小～大粒状の炭化物を2%、焼土を1%含む。
2	極暗褐色土（7.5YR2/3）とオリーブ褐色砂質土（2.5Y4/6）の5：5の混層。
3	明褐色砂質土（10YR7/8）に淡黄色砂質土（2.5Y8/4）を極小～大粒状に20%含む。

発 掘 調 査 抄 録

ふ り が な	はぐろたいかっこさんいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書 名	羽黒平（３）遺跡発掘調査報告書
副 書 名	－「美人川再生事業」に係る緊急発掘調査－
巻 次	
シ リ ー ズ 名	浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
シリーズ番号	第１６集
執 筆 者 名	木村浩一
編 集 機 関	浪岡町教育委員会
所 在 地	038-1311　青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村 101-1　tel.0172－62－3004
発 行 年 月 日	2005 年　3 月　31 日

所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号					
羽黒平(3)遺跡	浪岡町大字 五本松 字 羽黒平	229	290	40° 43′ 33″	140° 37′ 16″	2,850 ㎡	19950626～1130 19960603～1110	公園整備 事業

所 収 遺 跡	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
羽黒平(3)遺跡	散布地	縄文（後・晩） 時代、平安時代	建物跡・溝跡ほか	縄文土器・縄文石器・土偶・石製品・土師器・須恵器 など	

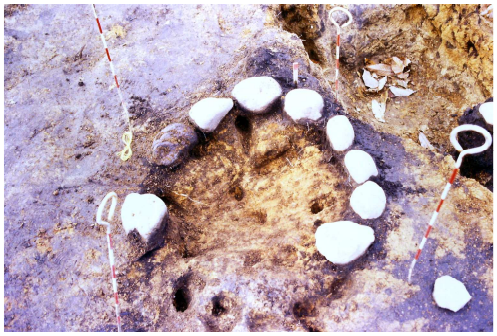
写真１．調査状況

南端部調査開始時状況（東側から）

遺構精査状況

沢部の調査状況（南側から）

ＳＩ１０完掘状況（東側から）



南端部石囲い炉完掘状況（東側から）

ＳＭ０１調査状況

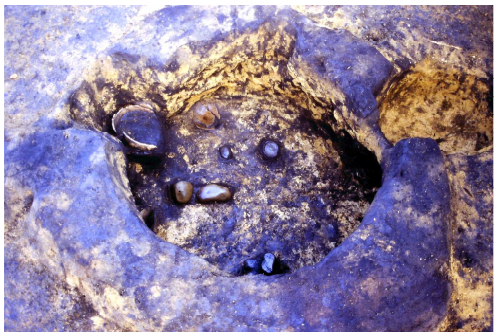
ＳＭ０７調査状況

ＳＭ１４調査状況

Ｐｉｔ７１調査状況

Ｐｉｔ７１石皿（Ｓ２００）出土状況

ＳＸ２１調査状況



ＳＸ２９調査状況

精査状況（北側から）

調査完掘状態（北側から）

浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第 16 集

羽黒平（３）遺跡発掘調査報告書

―「美人川再生事業」に係る緊急発掘調査―

発行年月日　平成 17 年 3 月 31 日

発　　行　浪岡町教育委員会

〒038-1311 青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村 101-1

TEL　0172-62-3004

FAX　0172-62-8166